

# とあるアークス達の(非) )日常

アインスト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ただ自分のマイキャラたちの生活を垂れ流すお話です。

気に入らなければブラウザバック推奨。

では、どうぞ（・ω・）

# 目次

エピソードVI、(ifストーリー)	
エピソードVI、(ダツシユ) ”消失プ	
ロローグ”	1
日常編・過去編まとめ	
クラツシユ「イカれた兄貴と姉貴達を	
紹介するぜ！」	6
フィリア「私に彼氏はあるか?ふふ、秘	
密だよ」	14
アリス「男って馬鹿みたい」	23
エクシア「トレイン・ギドラン滅すべ	
し」	29
カレン「私がフォースになった理由?」	
アーク「今更ながら人物紹介だ。すま	
ん」	41
レーヴェ「我は、強くありたい。皆のよ	
うに」	53
リユウ「可愛い子にはオシヤレさせた	
いじゃん!」	68
エピソード”クレア”	過去を振り
切って明日へ	76
エピソード”エクシア”	戦う機兵
に感情を	96
エピソード”フィリア”	優しいあ
なたへ	110

エピソード”クラツシユ”	く忌まわし	
き過去を越えて	く	119
エピソード”アリス”	くいつまでも	
一緒に	く	141
エピソード”リユウ”	く憧れのあの	
人へ	く	157
エピソード”アーク”	く老兵は死せ	
ず戦えり	く	171
エピソード”リーナ”	くリーナの	
につき(一)	く	193
テオドール「お願いだからあの歌でい		
じらないで……(泣)	く	200

エピソードⅥ、（ifストーリー）

エピソードⅥ、（ダツシユ） ”消失プロローグ”

フォトナー、シヴァ。

その存在が確認されて数日後のアークス。

その上層部で、会議の真つ只中であつた。

「それで？対策はどうするんだい？」

「いつ仕掛けてくるかわかりませんからねえ……しばらくは後手に回るかと」

「まあ仕方あるまいて。何より技術力が違うからな」

「それは私にもわかるぞ。あれはルーサーよりも強い。それは間違いない」

「皆、懸念事項はそれだけじゃないよ」

「……シャオ、アンタまさかまた隠してた事があるんでしょ」

「あはは……ご名答。やっぱりサラには敵わないや」

「それで、懸念事項とは？」

レギアスがシャオに問い質すと、ゆっくりと話し始めた。

「まあ……皆も知ってるだろうけど、ブレイドの件さ」

「あの守護輝士か。だが、その何が懸念事項なのだ？」

「いやね……彼、もともとフォトン量が桁違いなもので身体が耐えられないからキャストの身体だろ？」

「まあ、それはそうだろうねえ。アイツはかなり特殊だからねえ」

「そう、あまりにも特殊なんだ。まあ新しいフレームにしてからはそうそうリミッターが飛んだりはしてないけどさ」

「つまりあれは拘束具なのか？」

「いや、あの身体はあくまでもフォトンを適切な量で扱い、戦うための身体なんだ。分かりやすく言えばコンバーターみたいなものかな」

「変換装置、とな」

「うん。まあ別にそこが問題な訳じゃないんだけどね」

言いたいことがあるならハッキリ言いなさいよ、と内心で毒づくサラ。  
それに若干気づきつつも、話を続けるシヤオ。

「問題なのは、その身体に溜まり込んだダークファルス因子なんだ」

「ダークファルス因子、ねえ……」

「だが適切に処置はできているのだろ？なら問題ないじゃないか？」

「それがそうはいかないんだよクラリスクレイス……」

「何っ、どういう事なんだ？」

「あれ、なんだかわからないんだけど日に日に因子がホントにちよーつとずつ増してるんだよねえ……」

「……はあ!？」

あまりの衝撃発言に、声を荒げるサラ。

だがそれをマリアは制する。

そして、さらにシヤオは続ける。

「そんな状態で彼女……シヴァとやりあってみなよ。何をされるかわかったもんじゃ

ない。そういう事だから、しばらく自粛してもらおうかと思っただけ……」

「けど、何さ？」

「いやあれが言う前に任務に行っちゃってさあ」

「このっ、バカっ！何やってんのよ！」

「落ち着きなサラ。今吠えたって仕方ないだろ？」

「だけどマリア！このままじゃブレイドが！」

「アイツなら心配はいらないだろうさ。まあアタシが信用し過ぎてるのもあるんだろうけど」

「そういう事だから、とりあえずこっちでも観測は続けるけど……もし万が一。彼に何かあったその時は……頼むよ？」

その言葉で、その場にいる全員が頷いた。

だが、正にこの時濁り水はゆっくりと流れ始めるように、消失へのカウントダウンは始まっていたのだった。



## アークス船団近郊

「——潮時ですね」

「はい、シヴァ様」

「では始めましょうか。まずは己の力である程度減んでいただきましょう——目標は、かの守護輝士……ブレイドただ一人」

chapter  
zero.  
To be continued.

## 日常編・過去編まとめ

クラッシュ「イカれた兄貴と姉貴達を紹介するぜ！」

……ログイン。

システム、異常無し。

その後ドラクレスヘッドのアイカメラが光る。

……見慣れたマイルーム。

身体をメンテナンスハンガーから外し、辺りを見回す。

いつも通りだ。

ああそうだ、俺が何者か言っていなかったな。

俺はエクシア。

何処そのガンダムの名前に似てるって？

気にするな。

中央部屋から気配を感じると、そこには見慣れた赤いキャストがいた。

「よう。ようやくお目覚めか？」

「起床時間が遅れるのはたまにあることだ」

「言つてろ、ネボスケ」

そう言いながら椅子に座り込んでいる彼は「ブレイド」。

ブレイバークラスの優秀なアークスだ。

俺とは同期にあたる。

「それで？いい夢は見れたのか？」

「何も。いつもと変わらず暗闇だ」

「なるほど、そりやそうか」

「それで、何の用でここに？」

「クラフト依頼。素材寄越せ」

「嫌だ。お前腐るほど余ってるだろ」

「あ？お前から依頼されてやってんだ、素材くらいそつちで持てよ」

「……仕方ないな……ほら」

そうやって俺はアイテムウインドウを呼び出し、クラフト依頼のための素材を渡す。受け取ったブレイドは「そうだ、それでいい」とも言いたげな顔(?)でこちらを見る。やる。

「ところで、あの五月蠅い妹どもは?」

「知らん。恐らく俺より早く起きて出撃しているだろうさ」

「ほーん……」

なんだその気の抜けた返しは。

こちらまで気が抜けるだろうに。

そんな話をしていると頭を小突かれる。

振り向くと背後にはペットとして有名な「エアロ」がパタパタと羽ばたいていた。

その直後、聞き慣れた声が聞こえる。

「たっただいまー!」

「ただいま、兄さん」

活発的な声質はフィリアか。

普段は和服に近い服を着込んでいるプレイヤーだ。

パレットボウの扱いに長けているがカタナも扱えるというオールラウンダー寄りが主な特徴だな。

それに対し落ち着いた声質はクレア。

引つ込み思案で少々臆病な性格を持つガンナー。

だがツインマシンガンの扱いには非常に長けている。

いぎ、という時に実力を発揮できるのが特徴だ。

そして、遅れて怒鳴りながら小さな少女がマイルームに帰ってくる。

「ちよつとフィリ姉！待ちなさいよまだ話の途中でしようが！」

「えー？さっきのクエストまだ根に持つてるの？」

「それもそう、だと思ふ。だって姉さん、アリスちゃんの事偶然とはいえ盾にしたもの」

「いやだからあれは不可抗力でさあ」

今にも背伸びしてでも掴み掛からんとしている少女はアリス。

普段はペットの世話を欠かさずしているサモナーだ。

大胆な行動が取れる反面、いささか冷静さを失う事がある性格を持っている。

「だいたいフィリ姉はねえ！」

「まーまー、落ち着きなつてアリス」

「姉さんが言えた口じゃないと思う」

「うぐつ、クレアは辛辣だなあ……」

「うるせーぞお前ら」

「なあんですつてえ!？」

「あ、アリスちゃん落ち着いて」

「クレ姉は黙つてて！やらないと、今日こそあの赤ダルマをやらないと！」

「おお怖い怖い」

がるる、と噛みつく勢いのアリスとそれをいなすブレイド。

しかし本当に仲が悪いんだな……。

「チビが嫌ってるだけだろ」

「チビって言うなああああ!!」

アリスがうがー、と叫んでいるとまた二人マイルームに帰ってきた。

「おーおー、まーたやつてらあ」

「ふふふ、相変わらずだな」

「いやいや、兄様たち落ち着き過ぎでしょ」

背中に大きなナツクルを背負ったキャストはクラツシユ。

見た目通りナツクルの扱いに長けているファイターだ。

曲がった事を特に嫌い、仲間思いな性格の持ち主だ。

白いボディが特徴のマントを羽織ったキャストはアーク。

我々の祖父のような存在で、三種の武器を使いこなすヒーローだ。

本人曰く「引退したはずがシャオに頼まれてまた戻ってきた」らしい。

苦労しているな……。

そして、冷静に突っ込みを入れた少女はカレン。

キャストの中では珍しくフォトンの扱いに長けたフォースだ。

何事も大胆に通ず性格の持ち主だが、その性格が良い方向に転んだり、あるいはその逆も起きてしまう何とも災難な少女だ。

「で、アリスは何に怒ってんだ？」

「アイツが、あの赤ダルマが私をチビって言ったのよ!!」

「なんだ、いつも通りね。そんなの気にしなればいいじゃない姉様」

「そーいう問題じゃないのよっ!!」

「どうどう、まあ落ち着け」

「私は馬かっ!？」

「馬というより猪だろ」

「よし表出なさいブレイド！メタメタにぶちのめしてやるわ！」

「一人で行けよ。俺は忙しいから」

「きーっ、ムカつくうー!!」

……誰か俺に安寧をくれ。



誰でもいいから頼む……。

フィリア「私に彼氏はあるか?ふふ、秘密だよ」

アークスロビー。

そこは、様々なアークスたちが行き交う憩いの場。

そして今ここで、あるアークスが誰かを呼んでいる。

「おーい!相棒ー!」

「おー、アフィンくんじゃん!どつたの?」

「ど、どつたのじゃねえよ。相棒こそ何してんだよ」

「んー?それは秘密!」

「勿体ぶらせやがって……ま、いいか。暇ならちよつと手伝ってくれないか?」

「手伝い?……はっ、まさかアフィンくん私に卑猥な事を……?」

「んな訳ねえだろ!」

「そう?でもアフィンくんは男の子なんだからそーいう感情あると思うんだけどねえ」

「だあーもう!そんな事しねえって!」

アフィンくんは顔を赤らめながら私に抗議する。

ま、そーいう所がかわいいんだけどね。

で、今回はアフィンくんの付き添いで”ナベルダケ”の採取に行く事に。

やっぱりヤーキスおじさんに頼まれたのかな？

ヤーキスおじさん、意外と羽振りいいからね。

私もたまーにお世話になってる。金銭面で。

準備を終えた私たちはキャンプシップへ乗り込んだ。

「さーて、それじゃあ基本的に私はアフィンくんの援護かな？」

「おう、頼りにしてるぜ相棒！」

「はーいはい。んじゃ、行こっ？」

アフィンくんの手を引いて私たちは”テレプール”に飛び込んだ。

場所は森林エリアの一部みたいね。

「んー、やっぱり空気がいいねー。流石森林、心地良い緑の香りが最高」

「あ、相棒?」

「ん?何でもないよ、独り言。それよりアフィンくん、なーに顔赤くしてんのさ」

にひひ、と笑いかけるとすぐさま「あ、赤くしてねーよ!」と返す。

ああ、本当にかわいい。

「さてと……採取ポイントはこの辺かな?」

「みたいだな。そんじゃ、やってみるか」

「ピッケルいる?」

「あー、やべえ忘れてた。わりい相棒、貸してくれ」

「はいはい。これでいい?」

「うわ、相棒お前こんなに持ってたのかよ」

「いやー、いつの間にかこんなに貯まっちゃってさ。アフィンくんが使ってくれんなら別に大丈夫だよ」

「そっか。ま、早速使わせてもらおうぜ相棒」

そう言うアフィンくんはピッケルを握りしめ、採取を始める。

かといって私は何もしないという訳にはいかないので私も採取を始める。

「うーん、なかなか採れないね」

「ま、こればかりは仕方ねーよ。運に任せるしかないだろ……お？」

「どつたの？」

「採れた、ナベルダケ」

「おー、良かったじゃんアフィンくん」

「でもこれだけじゃちよつとなあ……」

「ならもつとやらなきやね」

「だな」

しばらく続けていると採れづらくなってきた。

こりや場所変えなきやダメだね。

「アフィンくん、ここはもう無いかも。場所変えよう」

「わかった。じゃあ行くか」

「どう？採れた？」

「まだ二つだな。相棒は?」

「私は三つ。ふつ、勝った」

「へへっ、まだまだだぞ相棒。今度は俺が勝つからな」

場所を変えたのはいいけれど、なかなか採れない。

やっぱり希少な物だから当たり前かあ。

……ん?

あれはエネミー?アフィンくんは?気づいていない?

ヤバイ。

「ふー、なかなか採れねーな……っとうおお!」

アフィンくんの背後にザウーダンが襲い掛かろうとしていたみたいだけど、そうは問屋が下ろさない。

私はすぐさまパレットボウ”グライジャダク”に持ち替え、ザウーダン目掛けて矢を射る。

脳天に当たったのか、力を失って倒れる。

「あ、相棒……サンキュー」

「ふふ、アフィンくん油断大敵だよー？」

「わりいな……」

「それじゃ、採取を続けー」

瞬間、私は自分が”吹っ飛ばされた”という事に気づくのが数秒遅れた。

アフィンくんが「相棒!!」と叫んでいる。

誰、私を吹っ飛ばしたのは？

「……っ、ごほっ、ごほっ……サイアク……」

「相棒、大丈夫か!？」

「なん、とか……」

「こいつ……確か奥地にいるはずの”ロックベア”!？」

「アフィンくん……逃げて」

「……馬鹿っ、相棒を一人置いて逃げられるかよ!」

そう言うところライフルを構えてロツクベアを睨み付けるアフィンくん。

……本当に君は、お人好しだね。

私も似たようなものかな、きつと似た者同士ってやつ？

「相棒、立てるか」

「うん……!」

「ここでアイツを倒して、それから笑って帰ろうぜ!」

「そうだね……そうこなくっちゃ!」

---

数日後、マイルームにて。

「それでねー?アフィンくんが凄くかわいくてさー?」



「はいはい、姉さんの惚けは相変わらずね」

「ちよつ、ひどいなクレア……」

「事実だから仕方ない。そうでしょ？」

「うぐぐ……べ、別に彼氏とかじゃないからいいじゃない」

「ならなんで顔を赤らめながら話してんのよ。話はそこからじゃない」

「そうそう」

「おふつ……クレア、アリス……最近辛辣って言われない？」

「さあ？」

「うう、お姉ちゃんは悲しいよ……しくしく」

「勝手に悲しんでなさいよ馬鹿姉」

「ついにはパティちゃん並ですか!!ちよつとひどすぎるよー!ちよつとお兄ちゃん何か

言つてよー!」

何故俺に振る。

答えられる訳ないだろ。

すると目の前の椅子に座って簡易的なボードゲームに興じていたブレイドが一言。

「何、フィリアでも青春してんだ。どっかのおチビさんとは違ってな」

「なあんですつてえ!？」

「事実だろうが。ん? 反論してみろよ」

「うっさい! こ、このノツポ!」

「ノツポ言うな。せめてカツコいいキャストのブレイバーお兄さんと呼べ」

「無駄に長いわ!」

そして今日も賑やかな1日が過ぎていく。

これがあるべき日常の姿なのだろう。

アリス 「男って馬鹿みたい」

「んー、ビバ！バカンス！」

「イエーイ！」

という訳で我々はちよつとした休憩がてら惑星“ウオパル”の安全地帯に来ている。

本当なら兄弟姉妹全員誘いたかったのだが、クラツシユ、カレン、アークさんは用事があるから遠慮するという話。

『バカンス？ いやいやそんな事してるより鍛練だろ。いつちよ兄貴も来るか？ 楽しいぞ鍛練』

『バカンスを楽しみたいのは山々なんだけど……ほら、私ってまだまだじゃない？』

だから少しでもテクニックを多く扱えるようになりたいからまた今度誘ってね、兄様』  
『ワシはいい。若者で楽しんでくると良い』

……という事で必然的に俺が引率。

泳いだりしないのか、だと？

馬鹿言え、水中用ボディを持ってきている訳ないだろ。

何だつて？そこはアークスなんだからどうとでもなるだろ？フォトンの力か何かで？

それはご都合主義というやつだ。

「兄さん」

「ん、クレアか。どうした？」

「ううん、何でもないよ。それよりどう、かな？」

「何がだ？」

「その、水着……」

水着か。

クレアが身に着けている水着は「セルベリアスイムウェア」だったか。色は当然緑系。

「まあ、似合っているんじゃないか？」

「曖昧だね……別に今更かな」

「それは貶しているのか？」

「そういうつもりはないよ。ただ、そう思った。それだけ」

「……そうか」

問答を繰り返すうちに顔面にビーチボールが直撃する。

それも結構な勢いで。

「あー！ごつめーん！」

「ちよつ、エク兄！大丈夫!？」

「……問題無い。少々痛かったが」

「まったくこの馬鹿姉、力加減考えなさいよ」

「あははー、つい本気でやっちゃった」

「というかエク兄、そこで何してんのよ」

「泳ぎたくないからベンチにいたただけだ」

「昔は普通に泳げてたくせに」

やかましい。

それはわかっているがどうもな。

「それよりクレ姉、何してたのよ？」

「兄さんに水着が似合っているかどうか聞いてみたけど」

「けど？」

「予想通りの答えが返ってきたからガツカリしてた」

「でしようね」

いったい何に期待していたんだ。

そういえばブレイドも連れてくれば良かったな。

あいつ確か今日はマトイと任務だったか。

「エブシッ」

「わっ……ブレイド、風邪引いたの？」

「いや、どうせあいつが俺の噂でもしてんだろ」

「仲、良いんだね。あなたとエクシアは」

「まあな。腐れ縁ってやつだ」

「ちよつと、羨ましいいな……」

「羨ましいだつて？」

「うん。私にはあなたくらいしか仲が良い人はいないし……」

「それは違うな。お前は仲間に恵まれてるだろ」

「そうかもしれないけれど……」

そうこうしているうちに一つの通信が入る。

それと同時に……アイツが現れる。

『……貴様を殺す』

「おうちよつと待てや」

マトイを置いて隅へ（「仮面」も連れて）。

「お前ちよつと空気読めよ。いい感じだっただろうが」

『知るか。お前は私、私はお前だ』

「ファツキンダークファルス」

『やかましい』

その後ボコボコにしてやった。

後悔は無い。

それにしてもマトイ……おろおろしてる所がかわいいな。  
なんか和む。



## エクシア 「トレイン・ギドラン滅すべし」

現在、地球では季節は秋。

こちらでもオータムモードである。

「おい、エクシアー」

「ど、どうも！」

何か、と思つて振り返ると以前地球にて世話になつた女性が二人、立っていた。

「……誰だったか？」

「八坂火継よ！ヒ ツ ギ!!あんた覚えてるくせにとぼけないで！」

「驚宮氷莉ですよ……覚えてないんですか？」

「冗談だ。それよりここについて大丈夫なのか？」

「大丈夫、どっかの誰かさんと違ってちゃんど許可取ってるから」

どっかの誰かさん……まさかシャオか？

そんな考えをしているとヒツギから一つお願いされる。

「俺が？」

「そう。せっかくだしどうかなくて」

「東京探索ならまだわかるが……まさか任務外の事とは」

「だ、ダメ、かな？」

「……まあ、いいが」

「なら決まりね。それじゃ早速行きましようか」

「でもヒツギちゃん、エクシアさんのその姿じゃ目立つんじゃないか……？」

「それはロボが好きだからコスプレしてるだけですよーって言えばなんとかなるわよ」

「そんな適当な……ごめんなさいエクシアさん」

「問題無い。念の為の準備をした甲斐があった」

「準備い？」

そうやって俺はディスプレイウィンドウを呼び出し、ある項目にタップする。

その直後光に包まれ、ヒューマンボディに変化する。

「……………うつそー……………そんなカラクリ、聞いてないんだけど……………」

「端から見たら人間っぽい……………」

「こういう時がいつか来るのだから持つておけ、と言われていてな。ピンときいたのでこいつにしたんだ」

そう言いながらイルミナス・コートのを引つ張る。

「ねえ、誰に言われたのよ」

「アークさんだ」

「……………ああ、あの人かあ」

「あの人ならそう言うかもね」

---

という訳で、東京。

こういった人混みはあまり好きではないが致し方ない。

「さて、何処から行こうかしら。やっぱり王道でショッピングモール回ってく？」

「いいねー、じゃあそうしようよ！」

「エクシア、あなたもそれでいいでしょ？」

「わかった。お前たちに任せるぞ」

それから、彼女らに手を引かれながら東京の街を散策する。

この絵面、大丈夫なのか……？

「それにしてもエクシアさんって背高いですね……」

「それだけ大きければかなーり目立つんじゃない？ 私達が迷子になってもあなたが目印になりそうだし」

「私たちが迷子っていう年じゃないと思うよう……」

それから数時間が経った。

楽しい時間というのは早く過ぎてしまうように感じる。

最後に、とヒツギがある場所に連れていく。

もちろん、地球ではない。

「わざわざアークスシップに戻ってまで、何を見せたいんだ？」

「……………着いたわ。……よ」

「……は……………？」

そこはナベリウスの遺跡地帯のある場所だった。

だが、見覚えがある場所でもあった。

「覚えてる？」

「……は確か……………」

「そう、私とあなたが初めて出会った場所。そして、初めて助けてくれた場所」

「へえ……………ここでヒツギちゃんとエクシアさんが出会ったんだ」

「まあね。どうせなら……ここにも来たかったから」

「それで？どうするつもりなんだ？」

「そうね……本当ならもうちよつとロマンチックにしたかったけどあなたなら別に  
いっか」

「どういう事だ、と言いかけたところで彼女の指先が俺の目の前に来る。」

「その後、彼女は“あなたを狙ってるのは一人だけじゃないって事よ”と言ってはにか  
んで見せていた。」

カレン 「私がフオースになった理由？」

ドカン、と腹に響く音が辺りに広がる。

爆心地から少し離れた所で彼女はいた。

「ふう、まあこんなもんか」

「あれだけ吹っ飛ばしておいてよく言いますね」

「……ん、ああ、アンタ来てたんだ。陰険眼鏡」

「陰険眼鏡って……貴女も彼女と同じ事を言いますね」

「そりやそうだろう？ 大事なことは最後まで黙ってた確信犯だしねえ」

「それは痛い所を……まあいいでしょう。それで私は何故カレンさんがここにいるのか聞きたいのですがね」

二人が存在している場所は、地下坑道。

機甲種が多く存在しており、いまだに動いているセキュリティも点在している。

「なんでつてそりやあ……その、フランカに頼まれたんだよ。何か料理道具に使えそうな物がないかってさ」

「料理道具、ですか。しかし料理しなさそうな貴女が、ねえ……？」

「だっ、黙れ！でなきゃぶっ飛ばすぞ！」

「赤面しながら言われても覇気がありませんよ？」

「うっさい！」

「僭越ながらお手伝いしましょうか？」

「一人で出来るからいい！」

「やれやれ……まるでクラリスクレイスを相手にしているようだ」

「あの爆破バカと同じにすんじゃないよ！」

スタスタと早足で先に進む。

その後ろをカスラが追う。

「……………」



「……どうしました？」

「なんで着いてくるんだい？」

「何故って、カレンさん一人だと何が起こるかわかったものではないですから」

「ようしちよつと表へ出な。サクツとぶつ飛ばしてやんよ」

「いやはや、血気盛んですねえ」

「誰のせいだ誰の！」

「まあ私のせいでしょうか？」

「わかってんじゃないか!？」

ある程度進むと何体か邪魔が入ったが優れたフォトンを用いてテクニックを発動、蹴散らしていく。

そうして、最深部手前に到着。

「しかし、ブレイドさんやリユーさんのような守護輝士ではないのによくやりますよね、カレンさんは」

「アイツらは特別なのさ。何より信念がアタシ達とは違うからね」

「特別、ですか。では、どのように？」

「そうだね……ブレイドはさ、」この世に蔓延る闇を斬り、宇宙の平和を取り戻してみせる。ってよく言うのさ。アイツらしい考えだ、いずれはダークファルスも斬るだろう」

「闇を斬る、ですか……確かに、レギアスやアザナミに次ぐ抜剣使いですからね。ですがその考え方はレギアスから強く影響されてますね」

「かもしれないねえ。アニキもそう言ってたからね」

「それで？リユーさんはどうなんです？」

「アイツも似たようなもんだけどちよつと違うね。あの子は……何がなんでも困ってる人を助けたいってヤツさ。だから平気で自分を犠牲にできる」

「なるほど、似た者同士と言ったところでしょうか」

「それはわからないよ。アタシが聞いた訳じゃないしね。客観的に見てそう捉えられただけだから」

そうやって歩みを進めるカレン。

一方で、守護輝士の一人が一際大きなクシヤミをしたのは余談である。

「イツキシツ」

「どうしたの？風邪でも引いた？」

「知らね。どうせ噂してるヤツでもいるんだろ」

「らしくないね、ブレイド」

「言うな。それより来るぞ」

「オツケー、まとめて叩っ斬る」

「それは俺の台詞だ、リユー。さて、仕事と行こうか」

蔓延る闇へと対峙する二つの光が一層煌めいた。

「輝いてっ、アトライクス!!」

「この輝きは星のように！裂けっ、フロラシオン!!」

「さっすが、鈍ってないねえ」

「お前もな、リユー。だが俺のストレスレまで斬撃を飛ばすんじゃない」

「あはは、つい手が滑っちゃった」

「お前はマリアさんか」

「あの人よりはマシでしょ？私ワザとじやないもん」

「まあいい、とにかくこのダーカー共を捻り潰すぞ」

「ほいほい、まっかせてー！」

「気合いを入れすぎて力むんじやないぞ」

「わかってるってばっ！」

今日も守護輝士は走る。

世の中のダーカーを殲滅するために。

アーク「今更ながら人物紹介だ。すまん」

〈キャラ紹介〉

・エクシア（レンジャー）

キヤスト兄弟の長男。

レンジャーだけあって狙撃の腕はピカイチ。

性格はきつちり。なおかつ柔軟な対応可能。

しかし女性には鈍い（鈍感）。

武装はライフルを好み、的確にエネミーの弱点を狙撃する。

なお、典型的な苦勞人。

◇「彼はですねえ、とても不思議ですよ。ライフルなら撃って撃って撃ちまくって殺して殺して殺して殺し尽くすのが普通なんです、彼は狙撃に一貫しているんですよ。まあ一撃で相手の弱点を撃ち抜く快感もわかりますよ。リサと任務に行く際は必ずバックアップに回ってくれますから大助かりですよ。」（リサ）

・フィリア（ブレイバー）

キャスト姉妹の長女。

打撃、射撃に関してなら完璧とまではいかながある程度ならオールマイティーにこなせる。

しかし、法撃はさっぱり。

性格はおおらか。何事も楽しんでる。

最近の楽しみは相棒であるアフィンをいじること。

武装はカタナ、パレットボウどちらも使うが、使用率はカタナが若干上回る。

なんでも駆けながら斬り倒すのが爽快だからとのこと（本人談）。

◇「相棒はなあ……なんていうか、その……そう、掴み所がないんだよ。いつも俺をからかって楽しんでるみたいだな。そういやこの間も一緒に任務に行った時”私のことどう思ってる？”って聞いてきたから相棒は最高の相棒だって返したらその後顔真っ赤にしてカタナの鞆で叩かれたんだよなあ。あれはなんでかわかるか？」  
（アフィン）

・クレア（ガンナー）

キャスト姉妹の次女。

双機銃の扱いに長けているが、バルバラには敵わないとのこと（本人談）。  
身体が柔軟である特性を生かし近接格闘しながら撃ち込む戦術を取る。

性格はやや臆病。ネガティブな発言をする事が多い。

武装は当然ツインマシンガンを使用。

舞いながらエネミーの懐に飛び込んで強烈な一撃を見舞う。

◇「あの子はある種の天才とでも言えるわ。私が教えられる事をスポンジのように吸収して自分のものにしてしているもの。ただ一つ欠点を上げるとすればやはりその後ろ向きな性格ね。彼女にはもつと自信を持ってもらいたいのだけれど、なかなか上手くないものね。でも彼女なりに前向きになりつつあるからこれからもきつと大丈夫だと思おうわ。」（バルバラ）

・クラツシュ（ファイター）

キャスト兄弟の次男。

軽い身のこなしで戦闘をこなすアークス。オーザとタイマン張れる。

とにかく鍛練あるのみ、修練だ、というのが常。

性格は豪快。とりあえず立ちはだかるのなら殴り飛ばすぐらいの勢いで戦う。

武装は主にナツクル。状況に応じてツインダガーを使用する。

ツインダガーで接敵し、ナツクルに持ち替え強烈な一撃を打ち込む……地球でいう”カクトウカ”となんら変わりない戦法である（そもそもカクトウカがツインダガーを使うのかは不明だが）。

◇「うむ。アイツは俺にとっては良きライバルだな。同じ打撃職だからよく気が合う。時たま模擬戦をするのだがまさに試合ではなく”死合”というべきだな。それだけ恐ろしいのだ、アイツの拳は。ここまで戦って俺が2戦勝ち越しているだけでも奇跡のようなもんだ。まだまだだな、俺も。ただ、アイツと死合った後マールに物凄く心配されたのだが……あいや、断じて違う、違うからな!? そういう関係ではないからな!?」（オーザ）

・アリス（サモナー）

キャスト姉妹の三女。

ペット大好きツンデレアークス。

普段はあまり素直になれないのか、少々きつい一言を言う事があるが本人はその後物凄く後悔しているらしい。

最近の悩みは素直になれない事とピエトロがうざったい事（本人談）。

性格は前述の通りツンデレ。でもペットは大好き。



ペットと一緒にいるとちよつとだけ素直になれるのだそう。

武装はタクト。主に連れているペットはジンガことアイン。

息を合わせて共に戦うその姿は戦場の指揮者のようとのこと（任務を共にしたアークス談）。

◇「ああ、マイフレンドのことかい？彼女は素晴らしいよ！あそこまで素直な子供達を育て上げられるなんてサモナーの創設者として嬉しい限りさ！時々マイフレンドとカフェでお茶をするのだけれどその時に子供達とふれあうマイフレンドはとーってもキュートだよ！ただ、僕の子供達とも仲が良いのは良いんだ。だけどどうして僕には素直じゃないんだろうと疑問を投げ掛けたら、アンタが構いすぎるからじゃないの？”つて言われたんだ……僕ってそんなに構いすぎているのかなあ……？”」（ピエトロ）

・カレン（フォース）

キャスト姉妹の四女。

テクニツクでエネミーを吹っ飛ばす事に生き甲斐を感じる特殊なアークス。

そもそもキャストなのにフォース、というのは珍しいらしい。

しかし彼女の場合有り余るフォトンをどう使うか、と悩んでいたところテクニツク使

いに覚醒した。

特筆すべきはやはりフォイエ系の威力。

通常のフォイエ系と比べて約1・8倍の威力があるらしいとのこと（マールー談）。

ちなみに他属性のテクニックは1・4倍と少々控えめ。

武装はロッド。特別製のロッドを作ってもらおうとジグに頼もうとしたが、やんわりと断られたらしい（六芒均衡マリアと同じように武装をぶつ壊す事がたまにあるらしい）。

◇「彼女は……凄い。キャストなのに持つてるフォトンの量の桁が違うもの。私がフォースはどうって勧めたらあつという間に強くなつていったし……たまに彼女と任務を共にするけど、彼女ほど頼もしい存在はないわ。でも……たまにオーザとはどうって聞いてくるのはちよつと嫌、かな。私は別に……そういうつもりじゃないのに……」（マールー）

・レーヴェ（ファントム）

キャスト姉妹の五女。

地球でいう”中二病”をやらかしたちよつと痛い子。

とはいえ実力は折り紙つき。新たに創設されたファントムにおいてキョクヤと良い

勝負ができる。

しかし調子に乗りやすいのが欠点。失敗すると時々素が出る。

ちなみに兄上姉上ラブ。

いつか未熟な自分から卒業して兄たちや姉たちと共に戦うのが夢。

武装はカタナ、ライフル、ロッドとバランス良く使用するが、若干ロッド寄り。

◇「あの女には俺ほどではないが目を見張る才能が眠っている。いつか真の影となる時が来るだろう。まあまだあの様子だとずっとずっと先だろうがな。だがまあ、期待していない訳ではない。いずれ共に戦える事を楽しみに待っている。」（キョクヤ）

・アーク（ヒーロー）

キヤスト兄弟と姉妹の叔父にあたるらしい。

実際は明らかにはなっていない。

しかしその実力は確かな物。

風の噂だが、六芒均衡のレギアスやマリアと同期なのでは？と疑われている。

本人はそうではないらしいが。

武装はソード、ツインマシンガン、タリス。

しかしソードを使っている所が多いらしい。

同じヒーローであるストラトスにとっては憧れのヒーローとのこと。

◇「へあつ、アークさんですか!?! えーっと、あの人は私にとっては本当に憧れの存在で、その、恐らく以前助けてくれたヒーローみたいな人と同じだと思うんですっ! なかなか話しかけるのが大変かなーって思ったんですけどそんな事はなくって何というか、お爺ちゃんみたいに話しやすいなーとか……ホント、恐縮です! でも私もいつかアークさんみたいに本物のヒーローになれるように、いえ、なりますっ!」(ストラトス)

・ブレイド(ブレイバー↓ファントム)

本作における守護輝士その1。

守護輝士と言われるだけあって物凄く強い。

基本的にマトイやリユーと行動している。

普段はヒューマン体で過ごす事が多いが、壊世区域など危険地帯に赴く際は本当の姿である赤いボディがシンボルのキャストになる。

つまるところ種族はキャストである。

武装はカタナ。エネミーを翻弄して一閃にて穿つ。

彼にとつてマトイはかなり特別な存在らしい。

◇「え、ブレイド? うーん……あの人は私と同じ、かな? 何でも抱え込んだりやう所

とかそっくりなの。でもね、私と違ってとても勇気がある人で……：凄く、カッコいいの——って、そ、そんなつもりじゃないよ!? べ、別に付き合つてるとか……：そんなんじゃない……：うう……：あ、そういえばまた大変な事に巻き込まれちゃったみたいで……：無茶してないといいんだけど。たまには私を頼つてほしいかなー、なんて、ね？」  
 (マトイ)

・リユウ(ブレイバー↓ヒーロー)

本作における守護輝士その2。

ここでは何気に珍しいヒューマン。

ちなみに彼女はブレイドが「深遠なる闇」を退けて数年眠つてちようどワールドスリープから目覚めると同時にシエラちゃんに叩き起こされてしまった可哀想な守護輝士。

ブレイドとは違って彼女は「救えるものは全部救う」という信念を持っており、時々ブレイドと衝突するがマトイにお互いが宥められる事が多い。

意外とオシャレ好きで他人を巻き込むほど。

クレアが一番良い例。

武装はソード及びツインマシンガン。

タリスはほとんど移動用だとか。

戦闘センスはブレイドと並ぶほど。下手したら全アークスの中でもずば抜けたセンスを持っているかもしれない。

◇「……ああ、リユークか。あいつはお人好しなんだ。恐らく俺よりもな。そこが良い所でもあるんだが……ダークブラストの一件では力をそれぞれ半分ずつ受け取っているがそれでも有り余る力だな。まあ俺にはダークファルスはいないがリユークは苦労しているみたいだ。同じ守護輝士として、たまには相談に乗ってやるさ。」(ブレイド)

・レイジ(クラス不明)

エクシアたちやブレイド、リユークを拾ったチーム”トリガー”マスター。

種族はヒューマン。

話によればとんでもなく強いらしい。

しかしクラスについては多くは語られておらず、時にハンター、時にバウンサー、時にヒーロー……と謎がとにかく多いアークス。

だが、行くべき道に迷っている者には的確な助言を伝えるベテランであることに違いない。

武装はクラスが特定されていないため不明。

◇「レイジさん、ですか？それがハイキャストである私でもよくわからないんですよ……。突然現れてアークスを助けたと思えばまた何処かに行つてしましますし……でもっ！とんでもなく強いのは明らかですよ、彼は！あれだけのエネミーをバツタバツタと倒せるんですから！いつか私がレイジさんの謎を解明してみせますよ、ハイキャストの名にかけて！」（シエラ）

「……ねえティア」

「何、バカ姉」

「この人たちちよつとオーバースペックじゃない？」

「今更何言つてるのよ。いつもの事でしょ？」

「うぬぬ、そりやそうなんだけど、さ……」

「何、もしかして怖くなつた？」

「いやいや、そんな訳ないじゃーん！むしろワクワクしてるよっ！これからどんな活躍をしてくれるのかすごく楽しみだよ！」

「やっぱりバカ姉はバカ姉だったか……」

「え、何？」



レーヴェ 「我は、強くありたい。皆のように」

「へえ、強くなりたんだ」

「そうなのだ。我もまだまだ未熟だからな」

カフェにて会話を交わすアークス。

片方はつい最近に創設されたクラス“ファントム”の使い手、レーヴェ。

もう片方は守護輝士として名高いヒーローの使い手、リユ。

話の内容から察するにリユがレーヴェの相談に乗っていたようだ。

「そーいう事ならまっかせて！良い方法があるんだよ」

「本当か！」

「マジよマジ、大マジ。この守護輝士のはしくれでもあるリユちゃんにまっかせなさいー」

どんつ、と自信ありげに胸を叩いてみせるリユー。  
そこに男女が二人訪れる。

「随分な自信だな、殊勝なことだ」

「げっ、ブレイド……」

「人を苦手なエネミーのように言うんじゃない」

「悪かったわよ。それで？ 天下の守護輝士様が何の用？」

「守護輝士なのはお前も同じだろうに」

「ま、まあまあブレイド、その辺でやめなよ……ごめんね、リユーちゃん」

「ありや、マトちゃんもいたのか。これは失礼したわ」

「先代クラリスクレイスをアダ名呼び——!？」

アダ名呼びしているリユーに驚きを隠せないレーヴェをよそに、話を進めるブレイドとリユー。

ようやく驚きから目が覚めたのか、レーヴェも話に参加する。

「それで？訓練するのだろうか？」

「まあね。そこでブレイド、アンタに頼みがあるんだけどいい？」

「断る」

「即答!？」

「冗談だ。で、俺は何をすればいい？」

「簡単な事よ。あたしたち守護輝士チームでレーヴェちゃんのアシストをするの！」

「我のアシスト？」

「こそ。ファントムについてならブレイドがよくわかってるだろうし、それにヒーローであるあたしに加えて補助担当のマトちゃんがいれば安心できるかなって」

「ありがたい……リユースに相談して良かったと心から思うぞ！」

「お礼はもうちよい後よ。そんじやそうと決まれば即行動よ！ブレイド！」

「問題ない。カリンには通達してある。VR訓練の準備はできているそうだ」

「マトちゃん！」

「こつちも大丈夫だよ。メディカルセンターの人に連絡してあるから、もし怪我をしちゃっても大丈夫！」

「よーしじゃあ行くわよー！」

そうして場所は変わりVR訓練用特別空間。

ここでは様々な特殊訓練を行う事が可能。

しかし通常訓練に加えてカリンからのオーダー（だいたいはあまり簡単には出来ない事）が入るため難易度は上がっている。

そんな場所に守護輝士が三人、そしてちっぽけな“亡霊”が一人いた。

「これがVR空間……意外と広いのだな……」

「そりやあねえ。大規模戦闘とかも想定されてるらしいし？」

「まあそういう事だ。ではカリン、頼む」

『はいー、わかりましたよー！今回は私のスペシャル仕様ですからね、気合い入れて頑張ってくださいー！』

「なんだろう、凄く嫌な予感がするんだけど……」

「マトちゃん、それわかるよ。なんだか相手したくないやつが出そう」

その直後、ブレイドにとっては相手取りたくない相手、“ダークファルス〔巨軀〕”、

そのヒューナル体が姿を現したのだった。

《我が名は【巨躯】！闘争の化身也！》

「面倒なやつを……わざとか、カリン？」

『いえいえー、わざとなんかじゃありませんよー？あなた方の深層意識に眠っている記憶からちよちよーいと拝借しただけですから、自然とあなた方が強敵として認識しているという事なんですわね。それだけ恐ろしい相手だった、という事なんですよ。あのダークファルス【巨躯】は』

「なるほど……だが今更そんな偽物に恐れはしないっ!!」

「どあつ、ちよつと!」

制止するリユーを振り切り、ろくに考えずに突っ込むレーヴェ。

当然のごとく【巨躯】はその強靱な拳で反撃し、レーヴェを後退させる。

《脆弱ツ!!》

「くうっ……クソオ!!」

「落ち着きなつて……！そりやつ！」

ヒーロータリスを投げ込み、レーヴェを救出するリユー。

その隙を逃がさんとばかりに攻撃するが、ブレイドが割って入りその攻撃を許さない。

「(重い——オリジナルと同等、それ以上か)」

《フハハハハハハハハ!!》

「面白い……！」

《——応えよ深遠、我が力にい!!》

「(至近距離でのクエイク!) チイツ!!」

ファントム特有の機動力を活かし、即座に身を引くブレイド。

その様子を愉快そうに啜う【巨躯】。

《やるな、アークスよ。久々に楽しめそうだ!》

「戯れ言を……リユー、レーヴエ、合わせろ」

「わ、わかったぞ！」

「はいよー、まっかせなさい！」

「皆、頑張つてね。シフタ——！」

マトイが明錫クラリツサを振りかざすと同時に赤い光がマトイ、リユー、レーヴエ、ブレイドを包む。

——シフタ。

限定的ではあるが数分間ほど闘争心を向上させ、打撃ならば筋力を、射撃ならば弱点を正確に撃ち抜く集中力を、法撃ならばテクニクを威力を底上げする精神力を増強させるテクニク。

「行くよー！」

「我也続くー！」

「後詰めは任せろ——！」

一番先に前に出たのはレーヴェだった。

勢いをつけて抜剣を抜き、その刀身を【巨躯】に向けて振るう！

「やあああああああ!!」

《愚鈍ツ!!》

「な、しまっ——うああっ!？」

「マズツ！レーヴェちゃん！」

【巨躯】の拳によって吹き飛ばされたレーヴェを地面に叩きつけられる前にリユーがその身体を受け止める。

「大丈夫!？」

「あ、ああ………」

「よくも可愛い後輩に手を出してくれたわね……!!」

怒りを露にしたリユーはタリスの瞬間移動を用い、一気に【巨躯】の眼前へと迫る。



すぐさま大剣に持ち替え、素早く振るう！

一撃目、拳で防がれる。

二撃目、胴体に右肩から左脇腹にかけて傷を負わせた。

三撃目、右腕に浅くも傷を負わせた。

四撃目、跳躍して避けられたが左脚に傷を負わせた。

五撃目、渾身の突きを放ち、腹部を貫いた。

六撃目に移行するところで左腕で殴られ、吹っ飛ばされる。

《ク、フハハハハハハハ!!面白い、面白いぞお!!》

「いい加減に、くたばれええええええ!!」

《又ウツ!?!》

——ライジングエッジ。

無数の斬撃からとどめの強烈な一撃を放つフォトンアーツ。

リユールがむしやらに放ったこの技の前に「巨躯」は——。

《グツ、ウオオ……良き闘争であつたぞ——！》

「あつ」

「——ハア——……」

「ああ……」

この時、レーヴェにはとてつもない無力感に襲われた。

”何も、出来なかつた”

”仲間の足を引つ張つてしまった”

そのような考えがよぎる。

「(我、は……;) 私、は……無力だ……)」

「あはは——……ゴメン、やっちつた」

「お前なあ……メインはあくまでもレーヴェエの訓練なんだぞ？」

「いやあ、つい後輩をやられたからカツとなっちゃって」

「熱くなるのは一向に構わんがもつと冷静になれ……」

「いやあほんつとゴメン！——レーヴェエちゃん？」

「……」

「ど、どうしたの？」

「……何でもない。帰る」

そそくさとVR訓練用特別空間から退出するレーヴェエ。

「……もしかして怒らせちゃった？」

「あの反応から察するに……なあ？」

「ど、どうするの？」

「もちろん追っかける！んで、ちゃんと話を聞いてくる！」

「それが最善だろうな。任せるぞリユー」

「もっちゃん！」

その頃、フランカ、sカフェの一角にある席で一人でぼつんと机に突っ伏していたレーヴェ。

彼女は自分自身の無力に嘆いていた。

「私は、無力だ……！いつもいつも皆に迷惑をかけて、足を引っ張って……！昔と何一つ……：変わってない……：！」

「私は、どうしても一人ぼっちなんだ……：！変わるために、憧れていたアークスになって、次世代クラスのファントムにまでなったというのに……：！」

「——私は、なんて無力なんだ……：！」

「あ、やーっと見つけた。そこにいたんだね、レーヴェちゃん」

「え——？」

嘆いていた彼女の前に、リユーが現れた。

そうして彼女は「前、座るよ？」と聞いて前の席に座った。

「我に、何の用だ……我は今、みつともない顔をしているかもしれないぞ……？」  
笑いたければ笑え……」

「そうだね。でも、あたしは一生懸命頑張ってるレーヴェちゃんを笑ったりなんかしない」

「何故だ……？」

「そりゃあレーヴェちゃん、貴女の努力を知ってるからだよ。毎日あれだけ根を詰めて任務に行ってるから余程強くなりたいう気持ちが強かったんでしょ？」

「……貴女に、何がわかる」

「わかるよ。あたしもそうだったから。あたしは、憧れてるアークスがいるんだ。一緒に時期にコールドスリープから叩き起こされてさ、何回かそいつと一緒に任務に行ったんだ。強かったよ、そいつは。あたしなんか比べ物にならないくらいね」

「わかつているなら、何故」

「なんでってそりゃあ、あたしもそいつみたいになんか強くなりたかったの。昔はそりゃ散々だったけど、今はたぶん認めてもらってる。積み重ね続けてきた結果が実を結んだんだ

な—って思ったけど、そうじゃなかった。そいつ、最初っから試してたんだったって！その時はもう腹が立ってね？ ついそいつの顔に一発殴っちゃったのよ。そしたらそいつ、笑ってこう言ってた。” 良い目をするようになったな。お前らしくて良いぞ” って！キザつたいセリフだったからド直球でキモいって言っちゃったけど……”

「…………ふふ」

憧れの存在を滅茶苦茶に言ったりリユーが面白かったのか、笑みを浮かべるレーヴェ。

「あつ、やつと笑ってくれた！」

「いや……：：：ありがとう、リユー。貴女は、強いな」

「そんな事ないよ。環境がそうしただけ。ゆっくり強くなればいい、そうでしょ？」

「ああ、我もそう思うぞ。気づかせてくれてありがとう、リユー！」

「んもう可愛いなあレーヴェちゃんっ！」

「ぬわっ、撫でるなあ！」

「ふふふ、よいではないか、よいではないかー！」

一方で、離れた場所で見守っていたアークスが二人。  
守護輝士であるブレイドとマトイだ。

「良かったね、仲直りできたみたいで。ね、ブレイド？」

「そうだな。アイツは強くなるよ、それもとんでもなくな」

「それって、あなたの勘？」

「そんなところだ」

「素直じゃないね、ブレイド？」

「よく言われるさ」

彼が見据えた先には、無邪気に笑いあう二人の姿があつた。

リュー「可愛い子にはオシャレさせたいじゃん!？」

「そんじゃあ、いこっか！」

「う、うん」

「案外珍しい組み合わせじゃない」

「ヒツギちゃん、行くよー?今日はクレアさんを綺麗にオシャレさせてあげなきゃ!」

「はいはいわかったわよコオリ。アル、行くわよ?」

「はーい!」

ああ、どうしてこうなったの……。

私、どうしてこんな場所（オシャレな服屋）に来てるの……（困惑）  
いつからだっただっけ……??

さかのぼること数時間前。



いつものように指令を受けて森林地帯で任務を遂行していた時のことだ。私が愛用している「ワルキューレR25S」でエネミーにトドメを刺していたところでリユーちゃんがやってきた。

「おー、やってるねえ」

「あ、リユーちゃん。あなたも任務？」

「んーん、ちよつと探し物……っっていうか……」

「……?」

じろじろと私の身体を見つめるリユーちゃん。

私、変なかつこしてるかなあ……?」

最近になって販売されたコンバットシリーズなんだけど……」

これを見たとき”これだ!”って感じがしてすぐ買っちゃったんだよね。

おかげさまで貯金が三割程吹っ飛んだけど……」

でもこれすごく戦いやすい服だからちよつといいと思ったの。

そうしてじろじろと見ていたリユーちゃんが一言。

「——ない」

「?」

「可愛さが足りないよっ!クレちゃん!」

「…………へ?」

「せっかく顔も整ってて可愛いのもつたいたい事するかなあ!?!そんないかにも”戦つてます!”みたいな服着ちやつてさあ!あーもつたいたい!」

「ちよ、ちよつと落ち着こう?今日のリューちゃん、なんだか変よ…………?」

「それは問題にならないからだいじょーぶ!とにかく、任務終わったらチームルームに来ること!おっけい!」

「あ、う、うん…………」

「待つてるからねー!!」

あらかた言いたいことを言ったのか、走って何処かへ行ってしまった。

うーん、少し面倒だけど…………行こう。

もし行かなかつたらへソ曲げちやうかもね…………。

それから30分後。

キャンプシップから戻ってきた私はそのままチームルームに移動。

そこでは待ってましたと言わんばかりのリユーちゃんと、女の子二人と男の子一人がいた。

私が入ってきたのがわかったのか、ものすごい速度でリユーちゃんが駆け寄ってきた直後、こう言った。

「クレちゃん、東京行こう！」

「……………えっ」

「そうと決まれば善は急げ！コオリちゃん、ファッションチェックはおっけい！」

「いつでもー!!」

「よっしやあ行くわよー!!」

「えっ、ちよ、ちよつと待って、お願いだから待ってよお!」

そうして連れてこられてしまったんだった。

ああ、あの時の私に言ってやりたい。

”チームルームには行かない方がいいよ” って……………。

まあ、悔やんでも仕方がない。

なるようになる、よね……………？

「それでこういうのはどうよ？」

「おおー、いいかも！クレアさん、どうですか！」

「え、いや、そのお……………い、いいんじゃないかな……………あはは」

「こらあー！クレちゃん可愛いんだからもつと自信を持ってー！」

「そんなの無理だよお……………」

「はあ……………何かと思えばそういう訳、かあ」

「おねーちゃん、どういう訳なの？」

「そうねえ……………オシャレに無頓着な人に教え込むダメな守護輝士の図、かな」

「ちよつ、ヒツギちゃんひどい！」

「そう言われても仕方のない状況だと思うけど？そこんとこどうなのよ」

ヒツギちゃんがそう言うのと、コオリちゃんとリューちゃんが縮こまって「返す言葉も……………」と頭を下げてしまった。

ヒツギちゃん、すごいね……。

「さて、と。それで?どうするの?」

「そりやもちろんクレちんを着せ替え人gゲフンゲフン、合いそうな服を見繕うよ!」

「私も頑張りますっ!」

「ほくも何か手伝えるかなあ?」

「アルくんはそこにおいていいよ!いるだけで可愛いから!」

「コオリ?」

「ヒエツ」

ヒツギちゃん目が怖いよ。

そんなこんなで色々見繕ってもらったんだけど……。

---

「こんなのどう!?!」

「こ、これはちよつとひらひらしすぎかなあ……」

「いやいやこれくらいが可愛いんだよ……………!」

「ええ……………?」

---

「これはどうです!」

「え、いや、これちよつと露出高くないかな……………?」

「これくらいがセクsゲフンゲフン、可愛いので無問題ですよ!」

「(もうどうにでもなれ……………)」

---

「疲れた……………」

服を選ぶだけなのにすごく疲れた……………。

あの後、選び終えて会計をすませた私達は帰りに“クレープ”を買って食べながら帰路についた。

身体も疲れているのがわかっていているせいかな、とても甘く、美味しく感じた。

「でも、楽しかったな」

任務で赴く訳ではなく、単純に遊ぶだけ。

最近そんな任務ばかりだったから、こういう感覚は久しぶりかも。

……また、一緒に行きたいな。

# エピソード”クレア” 　　く過去を振り切って明日へく

「そういえばクレアちゃん」

「？」

「クレアちゃんの昔って、どうだったの？」

「うっ……どうしてそれを聞こうと思ったの？」

「いやあ、あまり自分の話さなから気になっちゃってさ」

「うーん……あまりいい話じゃない、よ？」

「いいよいいよ！それで、どうなのかな？」

---

私が塞ぎ込んで、立ち直るまでには、話がちよつと長くなる。

あれは、私がまだ幼かった頃にさかのぼる。



当時12歳だった私は、アカデミーではそこそこの成績を修め、そこそこの友達とよく遊んでいたと思う。

私には親友と呼べる男の子が一人いた。

ロウ。

それが彼の名前。

彼には随分とお世話になった。

彼とはとても良い思い出を作れたと思う。

そんな事を考えながら市街地へ買い物に繰り出していたある日のこと。

私にとって、自らを殻に閉じ込めるきっかけの一つである事件が起きた。

……”ダーカー襲撃”。

それまで何ら辺哲のない日常を送っていた人々が、非日常に叩き込まれるという最悪な事件だった事を鮮明に覚えている。

そして、彼がそれで傷ついてしまったという事実も、覚えている。

『ロウ、早く！』

『わ、わかってる！お前も早く行け！』

『でも………!』

『ほら、早く行けっ!』

私たちは今すぐにでもこの非日常から逃れるために、必死に走った。  
だけど………。

『こ、こここまで来れば……ロウ……?ロウ、何処に行つたの……?』

彼がいない。

焦つた私は慌てて引き返し、ある程度戻つた所に彼はいた。

『ロウ!何を………』

『クレアか!ちよつと手え貸してくれ!』

『ど、どういう………』

『ここ、瓦礫で女の子が動けねえみたいなんだ。急がねえとここもヤバくなる………  
うなる前に頼む!』

『わかつた………行くよ?』

私が支え、ロウが瓦礫を少しづつどかしていく。  
十分も経たないうちに女の子を助ける事ができた。

『やった……もう大丈夫だからね。ロウ、私がこの子を運んでいくよ』  
『わかった、とにかく何とかな——』

瞬間、女の子の顔が青ざめていく。

私は突発的に女の子を抱え、彼に”逃げて!”と叫んだ。  
だけど、遅かった。

だって彼には……もうすぐそこまでダークカーが近づいていて、今にも攻撃しようとしていたのだから。

『一つ、オイマジかよ』

そう言った矢先、彼は吹っ飛ばされた。

私は逃げた。

いや、逃げて”しまった”。

私は偶然とはいえ、彼を見捨ててしまったのだから。

『ハツ、ハツ、ハアツ……嫌、嫌だあ……来ないでよお……!』

『おねーちゃん……こわいよ……』

『大丈夫、大丈夫だから……私が、いるからね……?』

『うん……あのおにーちゃんは……?』

『口ウなら……大丈夫よ。きつと……戻ってくる』

こうして事件は終わり、住民に身体的にも、精神的にも大きな傷が負わされてしまっ  
た。

……当然例外無く、私にも。

『あの、ロウは……』

『一応一命はとりとめたよ。後遺症もなく回復できそうなんだが……しばらく面会はできないかもな』

『そう、ですか……』

私の、せいだ。

私のせいで、彼は傷ついた。

私がつと早く気づいて教えることができさえすれば、こうはならなかつたはずなのに。

そうして私の心にぽっかりと穴が開いたまま、虚無感を覚えたまま……私はアークスになった。

当時の私は、傷つくことが怖くて、他人の目を見るのが怖くて、重く硬い装甲に身を包み、髪を長く伸ばして目を隠した。

だからこそなのか、同期からは”役立たず”とよく言われた。

元来私になつたガンナーというのは、敵に接近して一撃を叩き込む射撃職。

だけど私はあの時を思い出してしまい、敵に近づく事を恐れた。

だから、”敵に近づけないガンナーはいらない””いつもビクビクオドオドして見ていて腹が立つ””お前はいなくても誰も困らない”なんてよく言われたものだ。

そうしてアークスになってから一年が経ち、私たち新米アークスにも本格的な任務を任されるようになった頃。

そして、私にとって大きな事件の一つが起きた時期でもあった。

『やつと俺達に任務が降りたのか。つたく上は何考えてんだか』

『そうだな。俺達はもうやれる実力まで来たのだからさっさと寄越しても遅くはなかったはずなんだがな』

『でもこうして任務にありつけるだけいいんじゃないの？それに今回の任務は楽勝な奴でしょ？』

『まあな。だが……』

『なんで俺達のパーティにこんな役立たずを入れなきゃなんねえのかねえ……』

『……っ』

『仕方ないだろ。一応これが上にとっては卒業試験みたいなもんなんだから』

『そうそう。こんなのさっさと終わらせて、その役立たずからおさらばしましょ』

『だな。おいお前』

『……は、はい』

『こんな任務に連れて行ってもらえるだけありがたいと思えよ。お前は動かなくて良いから』

『わかつた……』

そう言い捨てられ、私たちはテレプールへと飛び込んだ。

それからと言うものの、順調に進んでいるように見えた。

私も自分が役立たずな事がわかってるから、そこそこ撃つて、後ろに下がっていた。

そんな時だった。

周囲から音が消えた事に気づいた私たちはすぐに身構えた。

『んだよ……静か過ぎんぞ』

『妙だ……ここまで静かな事が今までにあつたか？』

『か、考えすぎよ。それだけ敵を倒せてることなんだから、ほら、行きましょ！』

『お、おう』

『まさか——おい待てつ、進むな！』

『え——』

長銃を持った男が警告した瞬間、彼女の身体に無数の両刃剣が突き刺さる。

『あ、が……』

『お、おい……マジかよ……!』

『た、たす……けて……』

『ま、待ってろ、今助けてやる!』

『畜生、何が起きたんだよ!』

長銃で群がる鳥型ダーカーを追い払い、傷ついた彼女を助けに向かっていった。  
だけど……。

『なっ……数が多すぎる! さ、捌ききれん! う、うわあああああ!?!』

『レナードオオオ!! 畜生オオオ、どけえええええ!』

あつという間にダーカーの波に呑み込まれ、助けに飛び込んだ彼が追い払ったが遅



かった。

目の前で、いとも簡単に刈り取られた。

『クソツ……なんで……なんでこんな……!!』

『ね、ねえ……ここから早く離れた方が……』

『うるせえ！俺に指図するんじゃない！』

『で、でも……』

『とにかく何がなんでも突破するぞ……文句言うんじゃないぞ』

『うん……』

そう言って、歩みを止めることはなかった。

進まなければ。

そうして進んだ先で、後に“ブリュー・リンガーダ”と呼ばれる新型と遭遇した。

恐らくそれが元凶。

私が作戦を聞く前に、彼は突撃していつてしまった。

『テメエが親玉かあ!!ぶち殺してやるああああ!!』

『ま、待つて!今までの敵とは違う……!!ここは連携を……!!』

『るせえ!ガタガタ言つてんじやねえ!俺は一人でもやれるんだ!』

仕方なく私は援護に徹することにした。

だけど、一向に有効打が与えられているような印象がない。

まさかそのリング状の物体が関係している……?!

『クソツ、クソツ、クソツ!!いい加減くたばりやがれよお!!テメエみたいなのがいるから

!レナードは!タリアは!必ずここでえええええ!!——え?』

『——あ』

彼の背後には、小型の鳥型ダーカーが両刃剣を構えて今にも刺し殺さん勢いで突撃していた。

そうなれば空中で攻撃していた彼は格好の的であつて……。

”ドシユツ”

刃が身体に突き刺さる音が響き、彼は叫んでのたうちまわる。

『グアアアアアアアアアア!!イテエえええええ!!』

『そんな……!ううつ、近づけない……!』

『クソがああああ!早く俺を助けるよおおお!!』

私が助けに飛び込もうにも、取り巻きがそうはさせてくれない。そうして、あつという間に彼の周りにダーカーが群がり……。

『ああクソツ……早く、助け——ギアアアアアアアア!!!』

ダーカーに群がられ、次々に剣を突き立てられ、遂に命を落としてしまった。そうなると残った私が狙われる訳で……。

そこからは早かった。

私は一目散にその場を離れる事を決め、すぐさま行動に移した。

あらかじめ持ち込んでいた無用の長物に成り果てかけていたスタングレネードを投

げ、少しでも時間を稼ぐ。

そうして命からがら逃げ切った私は、教官から同情の言葉を受け取ったが、そんな事はどうしても良かった。

私は、役立たずなんだ。

私なんていなくても、いいんだ。

そう決めて私はしばらく自分の部屋から出ることができなかった。

---

それからしばらくして、気晴らしにショップエリアを散策していた時の事。

私は、アカデミー以来の友人に出会ってしまった。

彼が生きていたことには喜べたとしても、私が見捨てて逃げってしまった事には変わらない。

恨み言を言われるんじゃないかと思ってしまった私は、その場から逃げ出した。

でも、彼は追いかけてきた。

何処まで行っても追いかけてくる事に私は諦め、逃げることをやめた。

そして彼は私に問いたました。

『はあ……はあ……はあ……な、なんで逃げたんだよ……』

『だって……私は、貴方を見捨てて逃げたんだよ……?』

『見捨てて逃げたって……いつの話だよ？ 医者さんから聞いてないのか？ 俺は気にしてないって』

『それでも！ 私は、気にする……!』

『はあ……まあ、いいさ。それでなクレア』

『何……?』

『いや、せつかくまた会えたんだしき。近況報告って事でちよつと話しないか?』

『……わかった』

立ち話も何だから、と言われてカフェに場所を移してお互いの近況を話し合った。

私はアークスになった事を。

彼はあれから普通の民間人として復帰できた事を。

『へえー、アークスになれたのか！ 大躍進じゃねえか!』

『そんな事ないよ……私なんて役立たずだし……』

『役立たずってお前なあ……気づいてないかもしれないけどな、お前結構いい奴だよ。周りに気配りできてるしき、皆に優しいしよ』

『でも……私は、何も守れてない!』

『……』

『……ごめん』

『んや、いい。それよりクレア』

『何?』

『単刀直入に聞くぞ』

『——え?』

” お前、何のためにアークスになったんだ?”

その一言で、私は初めて自分が何のためにアークスになったのか改めて考える事ができた。

私は、何のために……。

最初は、先輩アークスたちへの憧れから。

段々養成施設で訓練していくうちに、「誰かを守るために」と考えるようになっていったと思う。

『誰かを守りたくて、アークスになったんじゃないのか？ 傷つく奴が見たくないから、なったんじゃないのか？』

『……そうだ。私は……』

『……よし、良い顔になったな。クレア』

『え——？』

『ここんとこずつと抱え込んでたんだろ。顔に出てたぜ？』

『うそつ……』

『ホント。お前昔と変わんねえなあ……そうやって自分一人で抱え込む癖も、さ』

『う……』

『だけど、良い顔になった。すつとした良い顔してるよ、今のお前の顔』

『そ、そんな事言って……もう』

『悪い悪い。でも、悩みはもうなくなつたんじゃないか？』

『——うん。ありがとう……』

『良いつて事よ。俺達友達だろ？』

この時、久しぶりに笑えたような気がする。

ずつと何かを抱え込んで、一人で無理をしていたのかもしれない。

彼のおかげで、少しはスッキリしたのかもしれない。

そうだ。私がアークスになつたのは、誰かを守るために……かけがえのない人を助

けるために、なつたんだ。

今までどうして忘れていたんだろう……。

もうよそう。

私は、今を生きているんだ。

昔は確かに辛いことはあつた。

でも、それは過去なんだ。

それを糧にして、今を生きていく事が大事なんだ。



『…………ふふ』

『どうした？』

『ううん…………なんでもないよ。ねえロウ』

『ん？』

『いつもありがとう』

『な、なんだよ…………照れるじゃねえか』

『言いたかったただけだよ。気にしないで』

この日から私は心から笑えた。

これからも、きつと大丈夫。

私は、アークスなのだから。

---

「…………ここまでが、私の話。つまらなかつたでしょ？」

そうリユーに聞くと、彼女は涙を流して鼻水をかみながら答えた……つてリユーちゃんそれ女の子がしている顔じゃないよ……（汗）

「ぜんっぜん！ズビツクリアちゃん健気すぎいい！」

「ええ……」

「そして君の友達は神様か！優しい友達で良かったじゃん！ズズツチーンツ！！」

「リユーちゃん……きたない……」

「はー……スツキリした……でもさ、それだけ辛い思いしたんだからこれからだよ。」

「これからしつかりと良い思い出作っていい？」

「そうだね……あ、あれもしかして口ウかな……ちよつと行ってくるね」

「ん、いつてらっしやい！」

そして私は彼の元へ走る。

あの時のように無邪気に語らう。

私は、笑えるんだ。

E  
P  
I  
S  
O  
D  
E  
  
C  
L  
A  
R  
E  
  
:  
  
E  
N  
D

# エピソード”エクシア” ～戦う機兵に感情を～

数年前。

俺が初めて起動したあの日。

俺はそこで起きたことを生涯忘れることはないだろう。

まず俺は何者なのか。

俺はある研究施設で製造されたいわば人造兵器だ。

コンセプトとして、情報特化型キャストに次いだ戦闘特化型キャストの開発において、射撃面に優れた個体を作るというプロジェクトの最初の一体、というわけだ。

後に呼称されるハイキャストになぞらえて、俺はこう呼ばれた。

”ハイエンド・キャスト”——と。

《被験体、前へ》

「了解」

《こちらで調整した長銃は所持したか》

「所持している。確認も終了した」

《よろしい。ではこれよりダミーターゲットを射出する。5秒以内に全ての確に撃ち落とせ》

「了解」

《テストNo. 62、開始》

《ダミーターゲット射出》

ダークカーを模したダミーターゲットが射出される。

数は15……1秒につき3体か。

コマ0. 3秒で1体ずつ片付ける他はなさそうだ。

射出されて0. 2秒後に構え、1体目のターゲットにサイトを合わせる。

トリガー。

発射……命中。

次。

発射、命中。

次。

発射・・・・・・・・命中。

《やはり素晴らしいな・・・・・・・・》

《だがやはり駆動系がフィットしていない印象だな。他にないのか？》

《今準備出来る分ではあれが精一杯ですね・・・・・・・・》

《そうか・・・・・・・・惜しいな・・・・・・・・》

《5秒経過したな。被験体、どうだ？》

「悪くはない。だが反射速度が若干遅く感じる。早急な解決求む」

《わかった・・・・・・・・本日のテストは以上だ。下がって休め》

「了解」

テストを終えた俺は整備用ハンガーに身を預け、またしばらく眠りにつく。

そして、時間になればまた起きてテストをこなす。

そんな毎日だった。

だがそれも、半年後に唐突に終わりを告げることとなる。

戦闘特化型の新たな種族、”デューマン”の登場。

それによりハイエンドキャストの必要性が失われることになる。

そもそもの話、俺という存在を造り上げるのに莫大なコストが掛かっていることを後に知った。

そんな高コストでは量産の目処など立つ筈がない。

さらにいえば、この時点で高水準にまで性能が引き上げられているが、それではかなり遅かった。

つまり、己の体を鍛え上げる方が早い話、効率が良いのだった。

そうして俺はある程度の実験データを収集された後に、”廃棄処分”となる……はずだった。

いよいよ廃棄処分になろうというある日の事だった。

俺が造られた研究施設にある男女が訪れた。

何かしらの見学だったのだろうか。

だが残念なことに俺はもうすぐ廃棄処分になる身だ。

日の目を見ることは、ないだろう。

そう思つてその日最期のテストに向かおうとしたその時だった。

「あれが件のキャストか？」

「は、はい……ですがデューマンの登場によって目の目を見ることはもうないかと……」

「ふむ……」

「あなた……どうするの？」

「……そうさな、そいつを我々が引き取らせてもらってもいいか？」

「なっ……それは構いませんが……宜しいので？」

「何、丁度子供が欲しいと思っていた頃だ。ならば、問題はあるまい？」

「はあ……わかりました。被験体、こちらに来い」

ふと呼ばれ、その場まで移動するとそこには初老だろうか……白色で彩られたボディを持った男のキャストと、その妻なのか、凜とした佇まいを見せる女のキャストが立っていた。

そして、研究員はこう続ける。

「この方たちがお前を引き取ってくれるそうだ。異議はあるか？」



「特にない、が……急だな。何があつた？」

「さあな……とにかく、お前はもう自由の身だ。好きなように生きて、好きなように朽ちると良い」

「……それが、お前の最期の命令か？」

「そうだ。いいか、我々の事は出来る限り忘れろ。そこからは無理強いを言う奴等はいない。自分で考え、自分で進む道を決める。それでもなお、戦う道を行くのなら……：……そうだな、アークスになればいい。後は、お前の自由だ」

「……了解。最終命令を拝領した」

「ああ……そうだ、あなたの名前をお聞かせ願えませんか？」

「私か。私は“アーク”。しがなただの老兵よ」

男の名前を聞いた瞬間、研究員は安堵したような表情になった。

それほどまでにこの男は信頼性が高いのか。

一考の価値はあるな……。

「さて……お主、名前は？」

「ただの被験体だ」

「随分と人間味のない名だな．．．．．セラ、何か良い名前はるか？」

「そうね．．．．．そうだね、あなたの名前は「エクシア」よ。それがいいわ。しつくりくると思わない？」

「そうさな。文句はないか？」

「ない」

「決まりだな。ではエクシア、帰るぞ」

「帰る．．．．．？」

「わしらの家だ。今後はお前もわしらの家族なのだからな」

「困ったことがあるれば気兼ねなく言ってちょうだいね。力になるから」

「．．．．．了解した」

「もう．．．．．固いわよ？そこは「わかった」でいいの。貴方はもう実験体じゃないんだから」

「そうだぞ。今後はもつとワシのように物腰を柔らかくだな．．．．．」

「それをあなたが言えた口ですか、もう」

「ぬ、すまんすまん。では行くぞ、エクシア」

「．．．．．ああ」

それから、俺にとって非日常が始まった。

最初は慣れなくて色々と悪戦苦闘したが……。

だがそれでも二人は親身になって根気よく教えてくれた。

そうして俺にとって非日常が日常に変わっていったある日の事、俺はある疑問を投げ掛けた。

「アーク」

「ん？どうしたエクシア？」

「いや……少し、疑問に思ったことが」

「何だ……言ってみると良い」

「貴方は……どうして俺を拾ってくれたんだ？ましてや他人で、人造兵器とも言える俺をなぜここまで？」

「……放っておけなかったのだよ。このまま朽ち果ててしまうお前をな」

「放っておけなかった……？」

「そうよ。この人、お節介なんだもの」

「セラ………」

「そうでなきや私を支える、なんて言わないでしょ？それに彼の事だって、わざわざレギアスに聞いてまで行っただもの」

「そうなのか？」

「まあおう……風の噂で人造人間のような物が造られると聞いたからな。いてもたつても居られなくなってしまうのだよ」

「全く……困っちゃうでしょ？」

「いいや……感謝している。戦うだけしか能のない俺に、暖かい感情を教えてください貴方達に」

「気にするでない。お前はもはや我々の家族なのだから」

「そうよ。これからもずっと、ね？」

「………」

そして幾ばくか時を経て、俺はアークスになった。

元から培われてきた射撃センスを買われ、直ぐ様レンジャーとなった。

その中でも狙撃センスがずば抜けて高かったと後に語られた。

それから自立し、一時的に彼らから離れることになってしまったが、恩師であるアークからは「いずれまた会える。その時を楽しみに待っているぞ」と恐らく微笑みながら言っていたと思う。

さて、始めよう。

ここからまた再び新しい物語が始まるのだから。

時には苦難があるだろう。

だが、それすらも乗り越えられる。

そう、信じて。

---

「あれ、あれあれあれー？どうしたんですかあ？そんな所で突っ立っているとりサ、間違って撃つちやいますよー？」

「ーん、すまない。少し感傷に浸っていた」

「昔の思い出を思い出すのは自由ですけど、今この状況で耽るのは勘弁してほしいですねえ」

「それもそうだな・・・どれ程経った？」

「ざっと10分つてところですねえ。よくもまあそんな長い間考え呆けられるものです。リサ、感心しちゃいましたよ」

「嫌みか？」

「さあてそれはどうでしょうねえ？とりあえずこの状況をどうにかしないと流石に厳しいと思いますよー？」

「そうだな……まさかここまで原生生物に集まられるとは思っていなかったが……リサ、援護してくれ」

「はいわかりましたー！一匹残らず足止めしていれば十分ですよね？ね？」

「問題ない」

惑星ナベリウスの一角で、背後は壁、前方は原生生物の群れ。

そんな絶望的な状況だが、俺はその場に伏せて狙撃姿勢を取る。集中している間リサには足止めを頼んでいる。

言動にやや問題はあるが、それでも信頼できるパートナーだ。彼女ならしつかりと足止めしてくれる。

さあ、始めよう。

やることは昔やっていたダメージターゲット狙撃テストと同じだ。

だが動きが緩慢な奴等にとっては何だの的だ。

——狙い撃つっ!!

「ヒット、ヒット、ヒット……やっぱりすごいですねえ……流石はかつて“ハイエンド”と呼ばれるだけの事はありますねえ……ふふ、ふふふふふ、良いですねえ。リサ、燃えてきました。私も負けませんよお!!」

「——次弾装填。カバー!」

「はいはいはい!リサにお任せですよ!」

それから数分が経つただろうか。

あれほどいた原生生物は骸の山と成り果て、やがて消えていった。

これだけ倒したんだ。もう大丈夫だろう。

その場から立ち上がり、ふう、と息をつく。

「状況終了、だな」

「いやいやいやー、助かりましたよー。あのまま呆けられていたら貴方をデコイにして

片っ端から撃って撃って撃ち殺してやろうかと思っただけですけどねえ……」  
「ぐ……すまない」

「でもまあ、いいです。久しぶりに楽しめましたからねー。さあさあ、早いとこシップに戻って報告することしちやいましょうか」

「……そうだな。帰還しよう」

「またこういう事があれば誘ってくださいねー。こういうことならリサは大歓迎ですよ」

「ああ。その時はまた頼む」

「はーい。お疲れさまですよー」

「……さて、とつとと帰って報告書を纏めるか……」

だが最近どうも変だ。

誰かに見られているような……？

……考えすぎか？

だがこの時の俺は想像していなかった。

”地球”と呼ばれる惑星で、よもやあんな出来事が起ころうとは……



「なるほど、ね。あれが伝説のスナイパー……でも、あんなNPCいたかしら……  
”マザー”はそんなこと言っただけじゃなかったし……もう少し、調べてみよう。そう  
すれば、あれも”バグ”だっていうことがわかるかもしれないし、ね」

E p i s o d e   E x i a . . .   E N D

エピソード”フィリア”  
　　～優しいあなたへ～

アイツはなんて事ないただのアークス。

それ以上でも、それ以下でもない。

ただそれだけの優しいヤツ。

……そう思っていた。

だけどアイツは、俺なんかよりもずっと辛い毎日を送っていたんだ。

「?どうしたのアフィンくん?」

「いや、なんでもねえよ相棒。わりいな」

「そう?変なアフィンくん」

「ハハハ……」

少し、昔話をしましょう。

これは私が生まれて、”私”が確立した、ちよつと不器用な私の昔話。まず私は何者か。

あなたたちは”ハイエンド・キャスト”という存在を聞いたことがある？

そう。なら話は早いかもね。

私はエクシアと同じハイエンド。

だけど、私が生まれた時期はちょうどデューマンが登場し、ハイエンドキャストそのものの廃棄処分が決まってしまった時期。

調整カプセルの中で研究員たちがそう話していたのが聞こえ、捨てられてしまうのかと怖くなった。

そうして私は調整カプセルから出された瞬間、研究員に一撃与えて近くに立て掛けてあつたプロトタイプアの抜剣を手に、研究所を後にした。

研究員には悪いことをしたと思う。

そういうえば私が何故抜剣を持ち出したのかまだ話してなかつたつけ。

もともと私はエクシアが取っていた射撃データだけでは不十分とされ、格闘データも欲しいからと言って2号機として私が造られた。

つまり、私は格闘に長けた個体。

まあそれも、テストを行う前に捨てられる事が確定してしまったために、データは取れず仕舞いだったみたいだけど。

そんなこんなで市街地まで逃げおおせたけど、問題はそこからどうするか。

研究所からまっすぐ逃げてしまったために、服装は被験体そのもののローブだった。

……今さらだけど考えてみたら下手すると事案案件よね、あれ。

そうなるの色々とやらしい目で見てる人がいるもんだからもう大変。

あまりにも酷ければ抜剣で脅しました。

仕方ないとはいえちよつと酷いことしちゃったよねえ……。

で、何とか命を繋いでいたのだけれど、ある時から身体が動かなくなってきた。

後に聞けば極度の栄養失調をきたしていたらしい。

そんな時に、私に声がかかる。

『お、おい！大丈夫かお前!?!』

『何——?』

『えーつと、あーつと、どうすりゃいい……考える、考える……』

『私に、何か用事——？』

『よし、こうしちゃいらねえ！とりあえずメディカルセンターに行くぞ！おぶつてやるから掴まれ！』

『——わかった……』

『よっ、と……軽いなお前。食ってなかったのか？』

『そうね……』

『お、おい？大丈夫なのか？おーい？』

彼の呼びかける声を聞きながら、私はゆっくりと意識を手放していった。

そうして次に私が目を覚ましたのは二日後の事だった。

メディカルセンターの一室でゆっくりと目を開けると、ベッドのそばで助けてくれた男の子が泣きそうな顔をしながら『俺がわかるか!？』と心配していた。

何もそこまで心配しなくていいのにな。

そんな事を考えていると、メディカルセンターのスタッフが訪れてきて、私に現状を教えてくださいました。

なんでも、かなり危険な状態だったみたい。

栄養失調だとか、免疫力極低下だとか。

スタツフからは何でそうなるまでほっといたんだーって怒られたね。

ああそうだ、この時に助けてくれた男の子が名前を教えてくれたの。

その男の子がアフィン。

今でいう”相棒”ってやつ。

今も可愛いけど初めて会った時も可愛かった事は覚えてるね。

何て言えばいいかな、ほっとけないっていうの？

つつい手を手を掛けなくなっちゃうのよね。

この時も私が若干不安になっていたのを察したのか、ずっと手を握っていてくれたと思う。

それから少しして、メディカルルームにこれまた知らない男の人が二人入ってきた。

青い青年キャストに白い壮年キャスト。

白いキャストが青いキャストに”彼女がそうか”と聞いていて、何の事だかさっぱり

だったんだけど、青いキャストが私に”お前はハイエンドだな？”と聞いてきたものだから、驚いちゃった。

『お前はハイエンドだな？』

『……そうだけど。アンタは？』

『お前と同じ境遇の者だ。ハイエンドキャスト、シユートタイプと言えばわかるか？』

『——っ！驚いた、私より先に造られたっていう個体じゃない……！』

『そういうお前はパワー・アームタイプだな？』

『お見通しつて訳ね……それで、どうするつもり？』

『お前さえ良ければ我々と来ないか？』

『……どういう事？』

『恐らくハイエンドは我々だけだ。孤立して行動するより纏まって行動した方がメリツトが大きいと判断した』

『……なるほど。まあ……：：：：そうね、その考え乗るわ。確かに一緒に行動が取れれば良いことはありそうだしね。でも、私が一人で動きたいときは一人で動いていいのよね？』

『問題ない。配慮はする』

『じゃあ決まりね。これからよろしく、お兄さん？』

そんなこんなで、エクシアとアークに出会い、兄妹みたいな関係になっていった。

それからもアフィンとはよく付き合ってるから時間があれば一緒に任務に行ったり。

多分この頃からかな。

私が彼を男として見始めたのは、それぐらいの時期だったと思う。

呆れるくらい優しくすぎる彼に、いつからか惹かれていったのかもね。

さて、時系列を戻って現在。

今でもなんとか意識してもらおうと奮闘してる訳んだけどね……アフィンくん、びつくりするぐらい鈍感なんだよね……。

おねーさん泣いてもいいかな？

ちよつと自信なくすなあ。

「どうしたんだ相棒？」

「んー、なんでもなーい。というよりアフィンくんは気づかない訳？」

「何が？」

「はー……もういいよう、忘れてちよーだい」

「な、なんかわかりいな……」

「そう思ってるなら……ん」

両手を広げ、待ち構える私。



この行動にアフィンくんは理解が追い付かなかったのか、ポカーンと呆然として  
いる。

あー、やつぱりかあ。

「ほら、おいでよ」

「え、いや、ええ!?なんでそうなるんだよ!?!」

「悪いと思ってるなら抱きしめてくれたっていいじゃない。それともそうできないくらいキミはヘタレなのかなー?」

「ばっ……そんなことねえよ!わかったわかった、やればいいんだろ?」

「ん、わかればよろしい」

仕方なしに抱きしめてくるアフィンくん。

それでも優しく抱きしめてくれてるだけでも心地良い。

彼の体温がしっかりと伝わってくる事で、私は「生きている」事が実感できる。

「……ねえアフィンくん」

「な、なんだよ」

「もし、さ。私がいなくなったら、アフィンくんはどう思う?」

「相棒がいなくなったら? そんなの考えらんねえよ。ユク姉の時と同じように探して見つけてやるさ」

「——クスツ……やっぱりそうだね。アフィンくんは優しいからそうなるよね」  
「何当たり前な事言ってるんだよ?」

「んふふ、それもそうよね。いつもありがと、アフィンくん」

私はぎゅつと彼の身体を抱きしめ、その日は彼の体温をずっと感じることにした。

私は、これからもずっと彼と一緒になら頑張れる。

そんな気がした。

E p i s o d e   F i l i a . . .   E N D .

エピソード” クラツシユ” く忌まわしき過去を越えてく

俺はクラツシユ。

元ヒューマンのキャストだ。

兄貴みてえにハイエンドって訳じゃないが、そこそこ戦えてると自負している。  
まあ、紆余曲折あつて兄貴とは義兄弟になったんだが…………。

「しつかし、酔狂なもんだねえ。俺みたいな野郎にインタビューとかよ」

「あはは…………うちのバカ姉がすみません」

「んや、構わねえよ。で、何が聞きたい？」

「えつとそれは「それはズバリ！キミの過去、昔話なのだよ！」——こんのバカ姉エ…………」

「え、ティアなんで怒ってるの？」

「なんでもない。それであの、差し支えなければ教えてほしいんですけど…………」

「わかった。だがまあ…………一つ、言っておく」

「？」

「これから話す事はお前さんたちにとってはかなりショックを受けると思う。それでも聞くか？」

その一言で二人は表情を曇らせるが、少ししてティアってやつが口を開いた。

「聞きます……聞かせてください。私たちには知る権利がありますから」

「そ、そうだよ。私にも聞かせて」

「——わかった。あれはだいたい前の話でな？俺がまだヒューマンだった頃の話なんだが……」

「えっ、キミ元々ヒューマンだったの!？」

「パティちゃんうるさい、黙ってて」

「ハイ……」

そう、あれは忘れもしない忌まわしき過去。

あの日、俺が復讐鬼になった過去。

そして、俺の愛した女が死んだ日の事をゆっくりと話し始める。

数年前。

まだ平和だった頃のアークスシップで、市街地にて俺はある人物と待ち合わせをしていた。

のんびりと待っていると、そのうち遠くから女の声が聞こえてくる。

『ゴメンっ、遅れちゃって！だいぶ待っちゃった？』

『んや、そんなことねえよ。俺がちと早かっただけだ』

『そう？ならいいんだけど……』

『んで、行くんだろ？早く行こうぜ』

『うんっ！その……ん』

『あん？何だその手？』

『て、手を繋ごうって言うてるの！もうっ！』

『あー……悪かったよ。ほれ、これでいいか？』

『うん、よろしい。じゃあ行こっか』

俺はあいつの手をしつかりと握り、共に歩き出した。

だがその数十分後、ダーカーの侵攻が始まってしまった。

この時から既にアークスだった俺は、すぐさま彼女を連れて避難勧告に走る。

この時彼女も手伝うと言って聞かなかったが、説得して避難してもらうことになった。

その道中で、恐らく親とはぐれたのだろう。

市街地の裏路地で小さな男の子を保護し、避難シエルターの近くまで避難していた。

『ここまで来れば……大丈夫だよね』

『まあ、な。余程の事がなきやな』

『良かった……でもクラッシュ、貴方はどうするの？』

『俺は戦うよ。お前らだけでも逃げるんだ』

『わかった。無理はしないでね？』

『なーに、心配すんな。俺はアークスだぞ？』

『それもそうね。じゃあ……帰ったらさ、また一緒にご飯食べようよ』

『そうだな。とびきり美味しいの頼むぜ？』

『任せて。待ってるから!』

そうして俺は背を向け、他に生存者がいないか探しに行こうとした。

その時、一迅の風が吹いていた。

俺は気にも留めず、そのまま歩き出した。

——背後から、子供の叫び声が聞こえるまでは。

『うわ、ああああああああ!!』

『なんっ……!!?』

振り向けば、そこには彼女だったものが首から上を飛ばして血飛沫を吹き散らしながら倒れている姿が見えた。

あんなにも、簡単に。

坊主が泣き叫んで助けを乞う。

俺はそいつの元まで走った。

——だが。

『に、兄ちゃん！』

『坊主！待ってろオオオ！』

『たすけ、でえ………!!』

『——ッ!!』

ついには、坊主の頭までもが吹き飛んだ。

何が起こったのか理解出来ぬまま、俺はそいつの目の前で愕然とし、膝をついた。

数秒、数分経ったのだろうか。



目の前から女の声が出た。

その女は黒い装束に身を包み、禍々しい双小剣を手にしていた。手にしていた双小剣からは、恐らく斬った者の返り血が滴っていた。

『存外、脆いものね。人間は』

『……………』

『——ああ、生き残りがいたのね。それもアークス……………』

『……………テメエが、殺ったのか』

『……………？たかが人が二人死んだだけでしょう？』

『テメエが……………殺ったのか……………!!』

『……………何よ、殺されただけで怒ってるの？そいつらは運がなかっただけでしょ。で、アンタは生き残れる運があったから生き残れた。違うかしら？』

『テメエは……………テメエだけは許しちやいけねえ……………ここで、テメエをハツ倒す!』

『ふうん……………やってみなさいよ。アンタがこのダークファルス〔若人〕相手にやれるのならね』

『ほざけええええええ!!』

両剣を強く握り、渾身の力を込めて肉薄する。

この時はダークファルスだとか、そんなものは関係なかった。

目の前に立つ仇敵を倒す。

それしかなかった。

『ゼエイツ！デリヤアツ！』

『遅い。鈍い。単純過ぎね。甘いわよ』

『ハアツ、ハアツ……こいつ……！』

『それに……私は一人じゃないのよ？』

『ツ!?!』

気がつけばいつの間にか召還されていたダーカー、ゴールドラーダに背後から吹っ飛ばされていた。

一気に肺の空気が抜け、俺は立つこともままならなくなってしまうた。

『ガツ……ハツ……クソ、があ……！』

『…………ふふ、見ている愉快だわ。ねえ、アンタ今どんな気持ち？目の前で二人も殺されて、倒すと息巻いておいて手も足も出ないなんて、どんな気持ちかしら？』

『ハツ…………今すぐにでも、テメエを…………ブツ殺してえぐらい、だ…………！』

『そう…………でも残念ね。ここでの目的は達成したようなものだからアンタとは二度と会わないわ。もし、縁があればまた会いましょう…………じゃあ、さよなら』

『クソ、アマア…………待ちやがれ…………!!』

踵を返して去っていくあの女を、俺はただ見ていることしか出来なかった。

そして、俺はゆっくりとその意識を手放してしまった。

あれから数日。

目が覚めると、いつも見ていたメデイカルルームの天井が見えた。

俺は相変わらずの重症一歩手前。

ダークファルスとやらに攻撃された事が影響しているのかもしれない。

俺の目が覚めた事に気づいたスタッフがあの時起きた事を報告する。

『……単刀直入に言う。あのシップは壊滅した』

『——だろうな。アイツは……アミは？』

『彼女の御遺体は回収している……全てな。あの子もだ。傷が癒えたら見てやれ』

『……わかってるさ』

『それから、君が対峙したあのダークファルスとやらだが……後に本部から通達があつてな。あれは【若人】という個体らしい。あの事件後、何度かりりーパで目撃されているそうだ』

『あの女が……りりーパに……』

『……なあ、わかってるとは思うが復讐なんてバカな真似はするなよ？』

『……さてね』

『おい……』

『それよりもアンタに頼みがある』

『……何だ？』

『……俺を、“キャスト”にしてくれ』

あれから、俺はあの女を殺すことしか考える事が出来なかった。

普通の肉体で耐えられないのなら機械の身体に。

斬つても敵わないのならさらに肉薄して殴れば良い。

あの女を殺せるのなら、どんな事もした。

任務外でリリーパに出向き、あの女が現れる事を待った。

そうする事で、少しでもあの女に近づけるかもしれないと、考えていた。

——だが、ついにその時は来なかった。

あれから数ヶ月待つても現れない。

人伝に聞いた事だが、どうやらあるアークスが「若人」に囚われていた女アークスを助けたらしい。

それを聞いて、俺はどうしようもない虚無感を抱いた。

いつかあの女を殺せると思ひ、綿密に準備を整えたのに、ダメだった。

来るときに備えて鍛えていたのに、ダメだった。

虚無感と同時に、喪失感をも抱いていた。

それからフラフラとロビーを歩いていると、なんだか賑やかな声が聞こえてくる。

男一人に……女二人。

仲睦まじい様子で話をしていたようだ。

……片方の女は見たことがないやつだ。

だが、もう片方を見ると衝撃を受けた。

——あの時、俺の大切な者を奪った女だ。

そこからは早かった。

助けられたとはいえ元ダークファルス……あの女なら、殺せる。

すぐに剛拳の安全装置を外し、あの女の元へと歩を進める。

そいつらは俺に気づいたのか、怪訝な表情をして声をかけてくる。

『ねえ、どうしたの？何か用？』

『……………退け。俺はあの女に用がある』

『私……………?』

『ユク姉に?それよりアンタは?』

『退けと言ったんだ。それにお前らには関係ないね』

『……………嫌だ。絶対退かねえ』

『……………その女はな』

『ユク姉が、何だよ』

『その女は、数ヶ月前に発生したダーカー襲撃で俺の大切なヤツを殺したんだよ……………』

『!!』

『——ッ!』

『お前に、わかるか!?目の前にやっと思つた仇敵を、殺せるのに!!』

『待てよ!それでも……………姉ちゃんはダークファルスに操られていただけだろ!』

『操られていただけだろうが殺したのはその女だ!!だったら同じように殺されても文句は言えねえだろうが!!』

そう言っていると、あの女は苦虫を噛み潰したような表情をして、そのうち何かを諦めたような表情になった。

そして、あの女は前に出てくる。

『……………確かにね』

『ユク姉!?!何やってんだよ!』

『アンタの言うとおり、私が殺した事に変わりは無いわ。謝ったとしてもアンタの傷は癒えないでしょうね。だから、私を殺して気が済むなら……………』

『……………!』

『ちよつ、ユクリータ!?!』

ユクリータと呼ばれた女は俺の腕を掴み、心臓の位置まで持つてこさせる。

『一思いに、アンタのその拳で私のここを打ち貫けばいいわ』

『……………正気か、テメエ』

『残念だけど、正気よ。ほら、私は抵抗しないから』

『……………』

何故だろうか。



ここまで来て、殺す気が失せてしまった。

この女は、俺と同じように被害を受けただけのアークスなんじゃないかと認識してしまっただらうか。

……流石に無抵抗の女を殴る気にはなれなかった。

『……どうしたのよ。早くしなさいよ』

『……やめた。無抵抗の女を殴る程廃れてねえよ』

『どういうつもり?』

『——別に、テメエも俺と同じだってことに気づいただけだ』

『後悔、するわよ……?』

『知るか。それより……悪かったな。俺の極端な思いでテメエを巻き込んでしまった』

『……何よ、アンタが謝るとか……それに、一番悪いのは私でしょ。なのになんでアンタが謝るのよ。謝るべきは私でしょ』

『……あ?』

『何よ』

俺は申し訳なかったと思ったから頭下げてるのに……何だその言い方……!

ついカチンと来てしまった俺は、つい言葉が出てしまっていた。

『テメエは悪くねえってんだろ。謝るのは俺だ。その辺普通考えりやわかなだろこのア  
マ』

『何ですって!?!』

『それとも何だよ、テメエが悪いからテメエが謝んなきゃ、とか思ってたのかコラ』

『は?!』

『おおん?!』

『ま、まあまあ二人とも、とりあえず落ち着いたら?』

『相棒の言うとおりちよつと落ち着けよユク姉、それからそのアンタ……』

『テメエは黙ってろ。俺は今このアマと話してんだ』

『アフィン、アンタが口を挟む事じゃないわ。部外者はすつ込んでなさい』

『ええ……』

『……アフィン君、もうほつとこ。これなら私らが入らなくても解決しそうだし』

『そ、そうだな……じゃ、じゃあごゆつくり……』

それからというものの、数十分にもわたって言い合いを続けていた。

そのうち疲れて、もう話すのも飽きた頃にアフィンたちが戻ってきた。

戻ってきたのは良いんだが……こいつがまあとんでもねえ爆弾を投げ込みやがったんだ。

『なあ相棒、俺思ってたんだけどさ』

『どつたの?』

『ユク姉とクラツシユさんって結構似合ってると思わねえ?』

『あ、わかるかも』

『ああ!?(はあ!?)』

『なんで俺がこんなカタブツ女に惚れるかってんだ!?(なんで私がこんなバカ男なんかに惚れなきゃなんないのよ!?)』

『んだとコラア!!』

『正論言つたままでしょうが!!』

『やんのかクソアマア!?!』

『良いわよやってやろうじゃないのよこのバカ男!!』

『……あれ、これって俺いらねえことしちやつた?』

『しちやつたねえ……』

そこから覚えてるのは、レギアスの爺様にこっぴどくお小言を受けたって事だけだ。

「——ま、ぎつとこんな所だな。聞いてて馬鹿馬鹿しいだろ？」

「い、いえ……」

「ねえねえ、それよりもそのユクリータさんとのご関係はそこんとこどうなのか詳しく！！」

「パティちゃん、空気読みなよ……」

「で、どうなの!？」

「あー……知らねえよ。よく話しかけてくるもんだからよつぽど俺が嫌いなんだろうよ」

「ふーん……？」

「ちよつとクラッシュ！アンタどこほつき歩いてるのよ！」

「だあー……お前は俺のかーちゃんかよ。悪いな、取材の途中で」

「いえいえ、そんな！」

「今度時間ありや何か奢ってやるからよ。それで勘弁してくれ」

「す、すいませんありますがとうございます！ほらパティちゃん行くよー？」

「えー、もうちよい話聞けるんじゃないのー？」

「ああもうこのバカ姉は……」

そうしてパティとティアはそそくさとその場から退散していった。

何だか気を使わせてわりいなあ……。

そんな事を考えていると、ユクリータが声をかけてくる。

「あ、アンタは……ああいう女の子が良いの？」

「は？何言ってるんだ？」

「くくくッ！もうっ！アンタって奴はもうっ！」

「あでっ!?脛を蹴るなよ脛を！イテッ、イッテエー！テメエ割と本気で蹴んなよ！」

「知らないわよ！」

「………つたく………」

「何なのよ……人の気も知らないで」

「あ？何か言ったか？」

「なんでもない!!」

「……あつそ」

なあ、見ているか？

俺、上手くやれてっかな？

お前みたいに、誰かを気にかけてやれてっかな？

答えることはなくとも、俺は聞きたい。

今の俺は、お前にはどう見えてる——？

「……何しけた顔してんのよ」

「……お、そんなツラしてたか。悪い」

「……何を一人で抱え込んでるのよ。アンタはもう一人じゃないのよ。私たちがいるんだからちよつとは頼りなさいよ……そんなに私たちが頼りないかしら？」

「……悪いな。俺、そんなに無理してたみてえか？」

「見え見えよ。アンタ単純だし」

「……あんがとよ」

「べ、別に私は……ただの罪滅ぼしのためで……」

「——そういうのはやめろ。罪滅ぼしとか、俺はそんなのはいらねえよ」

「でも、私は——」

「……ならよ、今度でいいんだけどよ。墓参り、一緒に来てくれよ」

「……それだけ？」

「おう」

「……わかったわ。アンタの大切な人にも言っておきたい事があつたしね」

「頼むわ」

なんだかお前みたいには上手いかねえみたいだ。

でもよ、今度お前んとこ寄るからさ。

その時話しようぜ。

待っててくれるよな、アミ。

俺は、多分上手くやれてつからさ。

期待してろよ？

E  
p  
i  
s  
o  
d  
e  
  
C  
l  
a  
s  
h  
:  
:  
  
E  
N  
D.



エピソード”アリス”  
くいつまでも一緒にく

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……」

アカデミーの廊下を走る少女が一人。

紫色の髪をサイドでまとめ、ややぶかぶかな制服を着た少女は何やら紙袋に何かを入れて何処かへ運んでいる。

そうして彼女は校舎裏にたどり着くと、小さな倉庫の横でしゃがみこみ、大きめのダンボールを開く。

「お待ちせ、”アイン”」

「わふっ」

「ごめんね、お腹すいたでしょ？今日もちよつともらつてきたから……ほら、食べて？」

「わうっ!」

紙袋から缶の入れ物を取り出し、蓋を開くと小さく刻まれた果物が入っていた。その入れ物をアインと呼ばれたワンダの目の前に置き、食べさせる。

「おいしい?」

「わうっ!」

「そう、良かった……何もされてないわよね?」

「くうん?」

「ううん、なんでもないの。気にしないで……」

それから少しして彼女も昼食を取るが、なかなか食が進まないようだった。実際、彼女はこのアカデミーではあまり仲が良い友人があまりいなかった。

それに、その原因として彼女自身の性格も挙げられる。

彼女は他人に対して素直になれず、棘のある言葉を放ってしまうため、一部を除いては身の回りに敵を作ってしまう性格だった。

それゆえに、異性に比べて同性からの敵は多かった。

そういった理由で彼女はアカデミーでは孤立している。

「はあー……いじめとかくっだらないわよね、アイン」

「わふっ？」

「……つて言つても、アインにはわかんないか。人つてのはめんどくさいもんなのよ？」

「うー……わうっ！」

「なーに、わかんないとか言われて拗ねちゃったの？ごめんねアイン」

会話を交わしながらそつと頭を撫でてやるアリス。

それを気持ち良さそうに目を細めるアイン。

端から見ても微笑ましい光景であった。

それから数日後、彼女を取り巻く環境に一つの変化があった。

「はー……思ったよりも時間かかっちゃったなあ……アイン寂しがってないかなあ……」

とぼとぼと歩いていると、どうやら校舎裏に先客がいたようだった。そつと様子を見ると、どうやらデューマンの男がアインと遊んでいるようだった。ゆつくりと近づき、声をかけるアリス。

「よーしよしよしよし、いい子だね」

「わふっ！」

「ちよつと」

「おつとお!？」

「人の友達で何してんのよ」

「ああ、これは失礼。この辺りからこの子の声が聞こえたものでね。僕はピエトロ。多分君の先輩にあたるかな」

「……あつそ」

「そうだ、良かったら君の名前を教えてくださいかな？」

ピエトロがそう聞くと、少しの間をあけて彼女は答えた。

ぶつきらばうに自分の名前を告げるとピエトロはにつこりと微笑み、「いい名前だね。親に愛されているじゃないか」と答えると彼女はやや赤面しながらそっぽを向いてしまふ。

「そういえば、その子は君が？」

「まあ、そうだけど」

「なるほどね。通りで随分とお利口な訳だ。きっと君思いの良い子に育つよ」

「……ありがと」

「それにしても、どうしてここで？」

「……女からの嫉妬つてやつよ。ハブられてんの、アタシ」

「何故だい!? 同じ志を持つ者同士じゃないか！」

「いくら誰かが優れてても誰かから恨みを買っちゃうのよ。それが偶々アタシだったつだけよ」

「だからって……！」

「とにかく、余計なお世話だから。あんまりアタシと関わるとアンタも被害を受けるわよ」

「……せつかくだけでも断らせてもらおうよ。こうして会った以上無関係という訳にはいかないしね。それに……」

「それに、何よ」

「——もう僕たちは友達だろうか？」

「……バカじゃないの。もう勝手にしなさいよ」

「ああ、勝手にさせてもらおうよ。それからアリスちゃん」

「何よ」

「一応僕二個上なんだよね……」

「——ッ!？」

ピエトロがそう伝えると、先ほどとは打って変わって赤面しながら頭を下げる彼女がいた。

ピエトロは気にしていないと伝えるも謝りっぱなし。

この時から、この関係は始まったのかもしれない。

「やあマイフレンド、待たせたね」

「おつつつそ。何時まで待たせるつもりだったのよ？」

「いやあすまない、購買がいつにも増して混んでてね」

「まったく……早く行くわよ。アインが待ってるし」

「そうだね。お腹を空かせて待ってるかもしれないね………そういえばマイフレンド」

「何よ」

「いや、最近そっちは大丈夫なのかい？」

「んー……言われてみれば確かに最近はちよっかい出されなくなっではいる、わね。

それがちよつと不気味ではあるけど」

「嵐の前の静けさでないことを祈るよ……」

「そうねえ……」

そうぼやきながらいつものように校舎裏に向かう二人。

だが、いつもではありえないことがその先であった。

校舎裏にやってきた矢先に何かを殴られ、痛みに鳴く声が出た。  
嫌な予感がしたのかアリスは荷物を落とし、走り出す。

「——っ!!」

「ちよっ、マイフレンド!?!どうしたんだい!?!」

いつもの場所、いつもの時間で来れば、友達が待ってる。  
そのはずだった。

「きゆう……」

「——っ、アイン!」

「ふうっ、いきなり走り出したと思えばどうしたんだい——ってそれは……!!」

「大丈夫アイン……ごめんね、痛かったね……誰にいじめられたの……?」

「ひどいな……こんなキレイな身体に傷が……」

「あーっ、ごっめーん」

「っ!!」



声の方向に振り向くと、アリスを良く思わぬ女生徒が数名立っていた。それも、不気味なくらいにほくそ笑みながら。

”それ”、アンタのだったんだね」

「アインに……何をしたのよ……」

「何って……私たちはただ遊んであげようと思ったんだけど」

「そうね。でも生意気にも噛みついてきたからついムカついて叩いちやった」

「生意気なところは飼い主に似たのかしらね？」

「そうかもねー、あはは！」

「——っ」

怒りでどうにかなくなってしまいそうなその時、ピエトロが前に出た。

アリスからは表情は見えないが、ピエトロも同じく静かに怒りを抱いていた。

「待つんだ、マイフレンド」

「……………ピエトロ？」

「何よ、アンタの彼氏？」

「まあ腐れ縁みたいなものだよ。それで少し話をしたいのだけれどいいかな」

「別にいいけど……そいつの味方するのはやめなよ。アンタも同じ目には遭いたくな

い……」

「嫌だ」

「……はあ？」

「僕は嫌だと言ったんだ。彼女がこんなにも悲しんでいるのに、手を差し伸べないのは

——ナンセンスだ。それに、君たちも美しくない」

「何よ、文句あるわけ？」

「大アリス。同じアークスを志す者だというのになんだいこの体たらくは。アークスを

志す者として恥ずかしくないのかい？」

「別に……そいつが生意気なのがいけないでしょ」

「浅ましいよ。考えが実に幼稚だ、下らないね。アークスの風上にもおけない」

「ぐ……」

「この際ハッキリ言わせてもらおうよ。君たちはアークスに相応しくない。今すぐにも立ち去ってもらいたいぐらいだ。アークスを志す者なら、そんな事はしらないと思うけどね。それならマイフレンドの方がずっと大人だ。少しは彼女を見習ったらどうだい？」

ズバズバと言葉をつらね、ついに何も言えなくなったのか「覚えてなさいよ！」と典型的な捨て台詞を吐いて彼女らはそそくさと立ち去っていった。

彼女らが立ち去って行ってアリスが声をかけようとしたその時、ピエトロは勢い良くへたり込んでしまう。

「ちよつと！大丈夫!？」

「あ、あつはは……腰が抜けてしまったみたいだ……情けないね、僕は」

「……ねえ」

「なんだい？」

「どうして、ここまでしてくれたの？」

「どうして……それはアリス、君が僕の友達だからだよ」

「友達……」

「そう。友達だから助けたいと思ったんだ。それだけの理由じゃダメかな？」

「……ううん、ありがとう。助けてくれて」

「お礼はいらないよ。さ、早くその子を医務室に連れていこう」

それから医務室に連れていくが、医務室担当の教師からちよつとしたお小言をくらったのは言うまでもない。

それから数日後。

どうやらあの事件が表面化したようで、例の数名の女生徒は何かしらの処分がされたようだった。

……何処かの武器破壊オバサンの手によって。

おっと誰か来たようd (判読不可能)

「やあマイフレンド、待たせたね」

「別に待ってないわよ。それで、何の用？」

「いや、あの子は元気になったかい？」

「おかげさまでね」

「わふっ！」

「あはは、良かった良かった。それでマイフレンド、ちよつと話があるんだけどいいか

な」

「何よ。下らないことだったら蹴り飛ばすわよ」

「大丈夫。きつと君も驚くさ」

「はあ……それで、何よ」

「マイフレンド、僕はね……新しいクラスを設立しようと思っているんだ」

「……はあ!？」

「とはいってもまだ計画中だけどね。でも先日的一件で決心がついたよ」

「……それで、新しいクラスって?」

「それはね、愛しの子供たちと共に戦場に立つて戦えたら……と思っでさ。きつとペットにも無限の可能性があると思うんだ」

「ペットと、一緒に……」

「そう。その名も”サモナー”。どうかかな?」

「……悪くないと思うわ。でも、できるの?」

「できるかできないかじゃないよ。やるのさ。僕がこの手で」

「……あつそ」

「あれ、もしかして興味ないのかい?」

「そんなわけないでしょ……まあ、頑張んなさいよ」

「ああ、必ずやりとげてみせるさ」

——それから、数ヶ月後。

その時期は、規定年数訓練を終えた者が卒業し、アークスになる時期。校門の前で、二人の人物が立っていた。

「おやマイフレンド、珍しいじゃないか。見送りがい？」

「……………違うから」

「それじゃあ何を……………」

「スウ……………私はアンタとここで約束するわ。絶対にアンタに追い付いてみせる。絶対にね!!」

「マイフレンド……………」

「だから、アークスになっても私の事は忘れないでよね!!」

「——ああ、わかったよ。でも、そう簡単には追い付かせないよ？」

「上等よ！絶対追い付いてやるんだから！」

そう言って、何処かへ走り去ってしまった。  
少しだけ、涙を流しながら。

「あはは……素直じゃないなあ……まあ、頑張るよ。待つてるよ、アリス」

---

## 数年後

「——やっと、ついにこの日がやってきたわね」

「がうっ！」

「さーて……待つてなさいよピエトロ。ここまで追い付いたんだから絶対に追い付いて、驚かせてやるわ！さあ行くわよアイン！」

「がうっ！！」

E  
P  
i  
s  
o  
d  
e  
  
A  
l  
i  
c  
e  
:  
:  
  
E  
N  
D.



# エピソード”リユ”

く憧れのあの人へく

数年前。

テミスの災害を覚えているだろうか。

あの忌まわしき事件を。

その際に、もう一人の守護輝士の卵が生まれた事は誰も知らないだろう。

これは、一人の少女の、憧れと恨事の物語である。

---

走る。

ただひたすらに走る。

なんでこんな事になったのか、私にはわからない。

けれど、これだけはわかる。

ダーカーが、私たちを殺しに来たんだ。

こんな所で死ねない。

逃げなきや。

逃げなきや——殺される。

そう思っていた矢先に、一匹のダーカーが立ち塞がる。

大きい。

アークスの人が言っていたつけ……確かあれは「ダークラグネ」とかだったはず。  
ダメだ、これじゃあ逃げられない。

——死ぬ？私が？

「いや、だ」

キチキチと牙を鳴らすダークラグネに恐れを抱き、うずくまってしまった。

「死にたく、ない——誰か、助けて——！」

一抹の希望にすぎり、私は目をつむった。ただ、何時まで経つても痛みが来ない。ふと目を開くと、そこには――。

「――無事のようなだ。立てるか？」

「え、あ……」

「心配するな、救援に来た。マトイ、奴を抑えてくれ」

「任せてブレイド。さあ、早く逃げて！」

「は、はい……」

後に守護輝士と謳われる、英雄が立っていた。

紅く染まったボディにバイザーに隠されたツインアイ。

彼の名は……ブレイド。

この時、私は彼に憧れを抱いた。

いつか彼のように、彼と同じように、戦えたら……。

そう思っていた時には、既に入隊申請を終えていた。

それから少しでも追いつきたくて、色々調べた。

あの方は抜剣を使っている。

ならば私も使おう。

あの方はブレイベーだ。

ならば私もブレイベーになろう。

そう考えて、気づけば彼を模倣していたと思う。

彼と同じくらい強くなりたかった。

それが、実を結んだのだろう。

いつかのハルコタン調査の際、私は彼に次ぐ実力者として称えられた。

——でも、私が求めているのはこれじゃない。

私は彼の二番目というレッテルを貼られてしまったのだ。

彼の模倣をしたがために、比べられた。

”ブレイドが出来ているのに何故出来ない”

”ただの偽物じゃないか、実力があるだけで”

……悔しかった。

彼と同じくらい強くなりたかつたはずなのに、今は彼と比べられて貶められている。何より、二番目というレッテルが一番悔しかった。

それからだろうか。

私は貪欲に強くなろうとしたのは。

一番に、なろうとしたのは。

---

「——は？私が、ですか？」

「ええ。今回の「双子」殲滅戦でブレイドとアーク、そしてもう一名と同行していただきます」

「だけどカスラさん、私が同行していいんですか？」

「ええ、問題ありません。貴女ほどの実力者ならそう判断されていますから」

「……わかりました」

「どこか、腑に落ちない事でも？」

「……いえ、何でもありません。失礼します」

そそくさと退室し、私は近くにあつた壁を力任せに殴り付けた。  
また、あの人と比べられる。

……ふざけるな。

「ふざけんじゃないよ……クソツ」

苛立ちを覚えながら、召集がかかった。

向かった先で、見覚えのある人物がいた。

——ブレイドだ。

「お前か。世話になる」

「まあ、あまり期待しないでくださいね」

「ははは、何を謙遜している。その実力は誇ってもいいのだぞ?」

「そう、ですかね」

「そうだけ。今回は頼りにしてるぜ、ヒーロー」

「……まあ、頑張ります」

「さてブレイド、戦術はどうするかね？」

「できれば各個撃破が望ましいが……状況が状況だ、厳しいだろうな」

「では、確実に一つずつだな」

「ああ……行くぞ」

そうして始まった殲滅戦。

うようよと「双子」が蔓延っていた。

始まって数分、数十分が経っただろうか。

ブレイドとアークと呼ばれた純白のキヤストは次々と撃破しているが、もう一人の疲労が見て取れる。

限界が近い。

かくいう私も、正直限界が近かった。

そして、その時は訪れてしまった。

「ぐわっ!」

「ハンクさん!大丈夫!」

「わ、悪い……ドジっちゃまった……」

「ブレイド!もう限界よ、撤退しないと!」

「……いや、殲滅は続行する」

「なんで!負傷者がいるんだよ!」

「考えてみる。今俺たちが退けばその後はどうなる。【深遠なる闇】に一撃を与えること

なくナベリウスが消えるんだぞ?」

「でも!」

「ブレイド、俺はいい……行ってくれ」

「どうするね、このまま進むか?」

「進みましょう。今の俺たちにできることをするまでです」

「見捨てるの!」

「いずれ救援が来る。それに今がチャンスだ」

「そうさな。【深遠なる闇】の反応が近い……つまり、これを逃せばナベリウスは消え

てしまう」

「でも、私は見捨てるなんて……!」



「出来ない、か。勝手にしろ、来るも来ないもお前の判断だ。アークさん、行きましょう」  
「承知した。悪く思わんでくれ、リユ」

そう言つて彼らは先へ行つてしまつた。

私は、やっぱり見捨てる事が出来ずそのまま残ることにした。

「嬢ちゃん、お前……」

「大丈夫。絶対守るから」

「だけだよ」

「……信じて」

「……わかつた。無理はすんなよ」

「わかつてるよ、そんなの」

……来た。

【双子】がまた、来た。

絶対に、守り通してみせる。

だけど、決定的な戦力差は埋められず、不利な戦いになっていた。

そして。

——パキンッ!

「——ッ!?!折れ、た——!?!」

「嬢ちゃん、前!」

「っは!」

ズン、と重い一撃が入る。

あまりにも衝撃が強く、軽々と吹っ飛ばされてしまった。

なんとか立ち上がるも、抜剣が折れてしまつて使い物にならなくなつていた。

これじゃ、戦えない……………!

もう、ダメなの……………?

「ッラア!!」

「ハンクさん!?!」

「諦めんな嬢ちゃん!先に諦めねえつて言ったのは嬢ちゃんだろ!それ使え!」

「レイソード……ハンクさん、ありがとうっ!!」

投げ込まれたレイソードを手取る。

クラス適応外のためか、かなり重く感じる。

だが、そんな事は言ってもらえない。

何より、私を信じている人のために。

戦う。

守るために。

「絶対……守るんだああああ!!」

それから数十分が経ったのだろう。

突然【双子】が形象崩壊を始めた。

それはつまり、【深遠なる闇】の撃退を意味していた。

「はーっ……はーっ……はーっ……終わっ、た……？」

「は、はは……すげーよ嬢ちゃん……」

「帰れる……んだね、私たち……」

そこから先は、直ぐ様メデイカルセンターに担ぎ込まれたせいで覚えていない。けれど、これでハッキリした。

私は、ブレイドのように非情になれない。

でも、それでもこんな私でも守ることは出来た。

それだけわかれば、もう何でも良かった。

それから少しして、因子浄化のためにコールドスリープする事になった。

それは彼も例外ではなかった。

---

それから二年が経とうとしたある日。

私は叩き起こされた。

シエラさんのおかげで。

二年の月日でかなり変わったようだった。

あの人にも会ったけど……やっぱり素直になれなかった。

わかつてはいる。

でも、以前の私がそうさせてくれない。

……歯がゆいなあ。

そうして裏方で任務を遂行していたある日の事。

どうやら新しいクラスの話が持ち上がったみたいだ。

そこで、私もクラス創設のために協力することになった。

そのクラスの名は——”ヒーロー”。

私が、目指したかったものだった。

でも、私は忘れてはいない。

今の私があるのは、彼が私を助けてくれたからだ。

だから、今度は私が助けになる番。

いつか、隣に立って戦いたいな……。

「先輩！準備できましたよ！」

「ん、ありがとね。じゃあ行こっか、スっちゃん」

「はい！気合い入れて頑張りましょう！」

「——もつと、強くならなきゃね」

「先輩？どうしたんですか？」

「あ、ううん何でもないよ！じゃ、行こう！」

「はい！」

待っててブレイド。

私は必ずアンタの隣に立って、助けになってみせる。

その日まで、待っててくれるかな？

E p i s o d e R y u . . . E N D .

エピソード”アーク”  
　　く老兵は死せず戦えりく

私の名はアーク。

今から話すのは、アークスが発足する前の話だ。

貴公らは知っているだろうか。

かのダークファルス〔巨駆〕が封印された時の事を。

あれは封印されて間もない頃だった。

私は当時レギアス、マリア、そしてセラと共に〔巨駆〕封印地点の探索を行っていた。

当時は封印したばかりで若干ながら不安材料が残っていた。

それは、封印されてもお分身体で活動を続ける〔巨駆〕の存在。

その鎮圧が我々の任務だった。

この時誰よりも強く、誇りがあつたレギアスやマリアが同行していたのが本当に心強かった。

だがまさか、私にとってこれからも後悔するような出来事が起こることなど、当時の私は考えていなかった。

「なんだい、またこの面子かい」

「仕方なからうて、マリア。我々は実力があるのだから抜擢されても文句は言えぬよ」

「そりやあそうだろうけども……それで？アンタらも呼ばれた口かい？」

「ええ、そうなるわ。またよろしくねマリア」

「些か力不足やもしれんがよろしく頼む」

「アーク、お前が力不足と言うのなら私はどうなる」

「君は力不足ではないだろう、レギアス」

「むう……」

「さあ、行きましようか。とにもかくにも原生種たちが脅かされるのは看過できないから」

「それもそうさな。では、行くとするか」

他愛もない会話を交わしながら、観測地点まで向かう。

この時には誰も予想も出来なかった。



あの惨劇が起こるとは、誰も……。

「……………この辺りか？」

「そうだね……………反応は比較的穏やかさね。これなら中途半端な覚醒はないんじゃないのかい？」

「もうマリアったら……………油断は禁物よ？」

「わーかつてるよ、セラ。まったくアンタはちよつとは気楽に構えたらどうなんだい？」

「それはそうだけど……………万が一ってこともあるでしょ？」

「そりやそうだけでも……………」

「まあまあ二人とも、この任務が終われば少しの間休憩できるのだから良いのではないか？」

「お、アークあんた話がわかるじゃないか」

「ちよつと、アークまで……………まあいいわ。確かにこの辺りならエネミーの反応もないし休憩してもよさそうね」

そう言ってセラはいつの間にか空間収納していたバスケットを呼び出しており、休憩

するための準備を進める。

とはいえ任務中なので我々男性陣は引き続き警戒にあたる。

……その時だった。

「——アークよ」

「……ああ」

「今の気配、お主にもわかったか？」

「うむ、言われるまでもない……これは、”出て”きおつたな」

「願わくば相対したくなかったが……致し方あるまい。アーク、マリアとセラを呼んできてくれ」

「応。警戒は任せたぞレギアス」

「心得た」

そうして私は少しの間持ち場をレギアスに任せ、二人を呼びに向かう。

彼女らの場所まで向かうとすでにマリアは察していたのか、目付きを変えてヴィタパルチザンを右手に持っていた。

セラもなんとなく察していたのか、飛翔剣を背中に背負っていた。

「アンタがその目であたしらを呼びに来たってことは……」出たんだね？」

「ああ、そう思ってた間違いない」

「なるほどね。で、何処だい？」

「レギアス曰くそこまで遠い場所ではないそうだ。比較的近い位置に半顕現している状態なのだろう」

「かーっ……一休みしようとしたところでこれだよまったく……」

悪態をつくマリアを余所に、レギアスの元まで戻る。

戻ったところで、現時点での報告をもらう。

「やはり反応は微弱だが、確実に移動しているぞ。間違いなく、完全な顕現を狙った行動と見える」

「なら、やるこたあ一つって訳だ。いいねえ、燃えてくるじゃないの」

「とか言って、ケガしないでねマリア？」

「わかってるよ。それこそレギアスやアークがいることだし、こいつらに頼らせてもら

うさ」

「ハハハ……お手柔らかに頼む」

「お手柔らかにとか言つてられなくなるよ、今にね」

「——そう、だな」

私は小さく呟き、反応のある場所まで出向いたのだった。

---

「……アーク、見える？」

「ああ、見えているぞ」

「レギアス、マリア、聞こえる？対象確認したわ」

「此方でも確認した。以前として封印地点に向かっているようだな」

「まったく、迷惑この上ないね。とつととハッ倒すよ」

「承知した。アーク、セラ、此方が先行する。援護は頼むぞ」

「了解だ」

「わかったわ。無理しないでね？」

「ハッ、私らがやられるとでも思ってたんのかい？」

「まさか。でも気を付けることには変わりはないでしょ？」

「わかつてるよ。じゃあ、先行するよ」

その言葉を皮切りに、レギアスとマリアは半顕現状態の「巨駆」に向かっていく。その瞬間、気配を察知したのか「巨駆」は迎撃状態に移行する。

《貴様らは……あの時の者共かああ!!》

「気づかれたッ！」

「問題ない、突貫するぞ!!」

「結局いつも通りかい！仕方ないねえ！」

「応えろ、世果エ！」

「ラビユリス、行くよ！」

《ふはは、来おい!》

その瞬間から、熾烈な戦闘が開始された。

レギアスが抜刀した世界を差し向けて斬りかかるが、【巨躯】も負けじと背中に背負っていた大剣を抜き、応戦する。

隙を見たマリアがラビュリスで叩きつけようとするが翔んでかわされてしまう。舌打ちしつつも次の一手を即座に叩き込むマリア。

「ーッ、浅いか……！」

《どうした、そんなものかフォトナーの操り人形よ！》

「クソア、あたしらはもう操り人形じゃあないんだよっ！」

「応とも。我らは“アークス”、星を護りし者だ」

《アークス……ふふ、ふはははは！なるほど、その名、覚えたぞ！来いアークス、貴様らの闘争を見せてみよ！》

「ハッ、上等！レギアス、合わせな！」

「了解だ！」

次の瞬間タイミングをコンマ単位でずらし、連続攻撃を浴びせる。

しかしそれでも相手はダークファルス。

やはり簡単に次々と回避されていく。

だが、ここで遅れてアークが大剣で割って入る。

割って入ったタイミングは完璧だったのか、強烈な一撃を入れることができたよう  
だ。

《むおお、おのれえ……！》

「ふむ、間に合ったようだな」

「ハハ、ドンピシャじゃないか！よくやった！」

「感謝する、アークよ。助かった」

「なに、お互い様と言うやつだ。それに……」

さらに遅れて飛翔剣で牽制し、セラが降り立つ。

「二人とも、大丈夫？ケガはない？」

「今んところはね。ま、奴さんが相変わらずヤル気満々なんだけどね」

「それはそうでしょうね。『レスター』」

セラが呟くと、暖かな光にレギアスとマリアが包まれ、傷が癒えていく。これは“レスタ”と呼ばれる光テクニック。

対象者の傷のある程度まで癒すことができる汎用型のテクニックなのだ。

「さて、どうすんのよ？」

「当然、奴を倒し鎮める。それが我々の任務だからな」

「そりやそうか……なら、いっちょやるかあ！」

「では、散開して撃破を狙うぞ！」

「了解！」

四方に散開し、次々と別ベクトルで攻撃を繰り返す。

だがしかし、いっこうに有効打を与えられずに数分が経過した……その時だった。

つい先程まで攻撃をいなし続けていた【巨駆】が突如として猛烈な反撃を繰り出してきたのだった。

流石にこちららも攻撃をかわさざるを得ない状況になり、一瞬だけ連撃の合間に綻びが



できていたことに私は気づけなかった。

そして――。

「クソツ、前々から思ってはいたけどタフすぎやしないかい!？」

「同感だ……!!」

《どうした、そんなものか》アークス”よ！ならば此方から行くぞオ！》

「マズツ――!!」

その瞬間、「巨駆」は瞬時に間合いを詰めて肉薄し、いとも簡単にマリアの体を吹き飛ばし、さらにはレギアスをも地に伏せて見せたのだ。

そして、私とその光景を見た直後にも「巨駆」は既に至近距離にまで私に接近していた。

その時、とてつもない衝撃を受けて吹き飛ばされたのは僅か数秒後。

軽々と私の体は宙を舞い、地面に叩きつけられてしまう。

叩きつけられた瞬間、全身のモーターが一時的に痺れ、わずかな間だが身動きができ

なくなってしまうた。

もちろんその隙をヤツが見逃すわけもなく、更なる追撃を仕掛けてくる。

私は傷ついた身体に鞭打ち、なんとか体を起き上がらせて回避する。

回避したのはいいが、やはり蓄積されたダメージがあつたのか力なく膝をついてしまった。

……今度こそやられる。

そう思ったその時、目の前に”何か”がその追撃を遮つたのだ。

——だが、その行為は私にとっては衝撃的な出来事だった。

「アーク……無、事……?」

「セ、セラッ!? 何故私を庇つた!」

「だって……あなたがいなくなったら……アタッカーがいなくなっちゃう……」

「だが……!!」

「いいの……お願い、ア、ク……あれを、鎮めて……!」

「!」

”レスタ”……

彼女は私にそう言い残し、最後の力を振り絞ってテクニックを使った。

その直後、彼女はゆっくりと目を伏せ、気を失ってしまった。

目の前の景色に呆気にとられていた私に、「巨駆」の音が響く。

《ふはは、良い仲間ではないか……だが、そこまでのようだな、アークスよ……終わらせてやろう——》

「……セラ、私那不甲斐ないばかりに……その意思、しかと受け取った……！ 終わるのは、貴様だ【巨駆】アアアツ！！」

《——何イツ……！！》

私はその身に残ったフォトンを全て手持ちの大剣“試作型ユニオンソード”に込め、高密度のフォトンの刃を形成する。

形成したその刃の切っ先を【巨駆】に向け、一言小さく呟いた後に腰を低く構えて肉薄する。

《何と……！！》

「言ったはずだ、終わるのは貴様だとな」

《フツ……見事だアークス——!!》

「——ゼヤアアツ!!」

ドシュウ、と深く、強く【巨駆】の胸部に大剣を突き立てる。

程なくして、声高らかに笑いながら【巨駆】の半頭現状態のヒューナル体は消えていった。

その直後私もその場で倒れ伏してしまい、意識が朦朧としだす。

遠くでレギアスに肩を借りながら歩み寄ってくるマリアが何かを叫んでいるが、聞こえない。

そして、その時ばかりは私は意識を手放してしまった。

---

それから、私が目を覚ましたのはあの日から実に二日が経とうとしていたときだつ

た。

やや見覚えのある天井……メデイカルルームだという事に気づくのに然程時間はかからなかった。

私が覚醒したのを見たメデイックスタッフが気分はどうかと問うてきたが私自身の事はその時はどうでもよかった。

私は、彼女の安否がわかればそれでよかった。

「……………彼女は、セラは……………無事かね……………？」

「えっと、それは……………」

スタッフは何処か歯切れの悪い言い方でうまく答えられないような様子だった。

そんな時、聞きなれた声が聞こえた。

「生きてるよ、一応ね」

「マリア……………無事だったのだな……………」

「それでも重傷一歩手前だったけどね。今はこの通りどこも悪くないよ」

「だがマリア、一応というのは……」

「言うより見た方が早いだろうね。ちよつとコイツ借りるよお嬢ちゃん」

「えっ、ちよつと待つててください！まだ退院できるかわからないんですよお!!それに今覚醒したばかりでs」

「大丈夫、コイツはそこまで柔じゃないよ。んじゃ、借りるからね。アーク、着いてきな」  
「わかつた……」

「え、ええ!?ちよ、ちよつとお!まだバイタルすら測ってないんですつて……ああんもう!!」

狼狽えるスタッフを尻目に、私はそのまま言われるがまま彼女に着いていった。

着いていった先にあつたのは、集中治療室のような場所。

そのまま中へと入室し、その先に彼女はいた。

……大小様々な管に繋がれた、彼女が。

「こ、これは……マリア、どういうことなのだ!？」

「言つただろ、一応生きてるって。だけど」ああ「やっておかないと死んじゃうのさ」  
「これでは……生きてるとはとても……!!」

「だろうさね。だから今起きた寝坊助のアンタに決断させにここに連れてきたんだよ」  
「……決断？」

「そつ。このままずっと生かし続けたとしてもいずれは死ぬ。だから今この時に楽にさせるか、あるいは……」

「キャストになるしか、ないね」とマリアは何の躊躇いもなく言い切つた。

「なつ……キャストになるにせよ彼女の意思に反してしまうのではないか!」

「仕方ないでしょ一向に目エ覚まさないんだから。でなきゃアタシもここにアンタを連れてこないって」

「だが……!」

「決定権はレギアスもアタシもアンタに委ねるつもりだよ。キツいかもしれないけど、決めてくれるかい？」

「……少し、時間をくれまいか」

「——わかつた。だけど早めに頼むよ? いつ状態が変わるか分かつたもんじゃないから

「や」

「……………うむ」

実のところ、私は後悔していた。

あの日あの時、私がああならなければ、彼女は生死をさ迷うことなどなかったはずだと、マリアから彼女の容態を聞かされた瞬間からぐるぐると考えていた。

ましてや彼女を生かすためにキャストにしたとして、余計に彼女を悲しませるのではないかと思考を巡らせていた。

それならばいっそ――。

……………そして、数時間にわたって考え、ロビーのベンチに腰かけていた時だった。

「……………マリアか」

「その様子だと、まだ決まってるみたいだね。何を迷ってるんだい？」

「……………私は、怖いのだ」

「怖い？何が？」

「もし、もしだ。彼女をキャストにしたとして、彼女が生き延びたでしょう。だが、たったそれだけの決断で彼女を悲しませるのではないかと思うと私は……………」



最後まで言おうとしたその時。

不意に左頬に激痛が走る。

……どうやらマリアが私を殴ったようだ。

そして、マリアは言葉を続ける。

「だあーっ!! アンタそれでも男かい!? さっきから聞いてりやウジウジウダウダとお！  
前々から思ってたけどアンタセラに惚れ込んでんだろう!?!」

「な、何故それを今……」

「いいから聞きな!」

「ぬう……」

「惚れ込んだんなら男として覚悟決めて、”俺がお前を支えてやる” って言ってるやんな  
!! セラはそれをきつと待ってる!!」

「だ、だが私が言ったところで迷惑では……」

「アンタが惚れ込んだ女なんだから大丈夫に決まってるだろう!?!」

「む、むう……」

「……はあ、言いたいこと言えてスッキリしたよ。で、アンタはそれでもなお手をこま

ねいているつもりかい？」

「……そう、だな……すまなかった、マリア」

「謝罪はいらないうての。行くんだろ？」

「ああ」

「じゃあ早いところ行ってやんな。まったく世話の焼ける野郎だこと……」

「……ありがとう」

「——煽てても何も出ないよ。ほら、行った行った」

そうして私は、その決断を下した——。

---

時は流れて現在。

私は、自室の一角である写真を眺めていた。

そんなとき、不意に声がかかる。

「あなた、ここにいたのね。何を見ていたの？」

「……なに、昔の写真だ。そこまで面白いものじゃ——」

「あら、この写真。まだ持っていてくれたの？」

「ぬ、ぬう……」

「懐かしいわ……私がキャストになって戸惑っていたときにあなたが”これからはずっとお前を支えてやる”って言うてくれたのよね。今思えばちよつと不格好なプロポーズな気がするけど」

「セラ……私はだな……」

「いいんです、わかってるから。あなたは不器用なもの。でも、そこが可愛いじゃない」  
「むう……」

そう言つてセラは私を見据え、私に問うた。

「ねえ、あなた」

「……………何だ？」

「これからも、私を支えてくれますか……………？」

「——勿論だ。お互いに支え合いながら行こう、セラ」

「そうね……………今後とも、末永くよろしくおねがいますね、あなた」

「うむ、セラもな」

「ええ、わかつてるわ」

彼女はそう言って、私に儚くも華やかな笑顔を見せてくれた——。

きつとこれからも、私は彼女と支え合いながら前へ進む。

それはきつと、若き戦士たちへの道標になると願いながら。

さあ行こう、セラ。

私たちはまだ休んでる場合ではなさそうなのでな。

ゆつくりと、歩みを進めよう。

何かに繋がる、その時まで。

E p i s o d e   A r k . . . .   E N D .

## エピソード”リーナ”　　くリーナのにつき（1）　　く

○月×日　はれ

『はじめてのにつき』

今日リユ－姉ちゃんに、日記帳をもらったから今日から書いてみる！

楽しい事とかいつぱい書けたらいいなあ………！

○月△日　はれ

『ブレイドさんとおはなししたの！』

今日はやる事が終わってひまだったからふらつとカフェに行つたよ。

そしたら、守護輝士（リユ－姉ちゃんもやつてる！）のブレイドさんが一人でさびしそうに飲み物を飲んでたからそこまで行って見たの。

で、着いたら「どうしたの？」って声をかけたらブレイドさんは「お前か………なんでも、いや丁度良い。少し付き合え」って言って飲み物を頼んでくれたよ。

お金は払うよって言ったけど、ブレイドさん「俺なりのケジメだから気にするな」って言うっておごってくれたの。

今度お礼しなくちゃ！

それからおはなしを聞いてると、リユウ姉ちゃんに向けたグチをこぼしてた。

ついリーナは「リユウ姉ちゃんが嫌いなのか？」って聞いてちゃった。

そしたらブレイドさんは「いや、嫌いじゃない。だがあの性格はどうも苦手だな……悪いとは思ってるさ」だって。

やっぱりブレイドさんってカッコいいけど不思議な人だなあ、って思った。

○月□日 くもり

『フィリアお姉ちゃんのお胸はふかふかなの！』

今日はレーちゃんと任務を終わらせて、一緒にロビーを回ってたよ。

そしたら見慣れた和服を着ていたお姉ちゃん……フィリアお姉ちゃんを見つけたの！思わず走って飛び込んだじゃった！

ぎゅーって抱きしめて、頭をすりすりーってしてたらふかふかで柔らかくてついつい

表情が緩んじやった。

その様子を間近で見えていたフィリアお姉ちゃんはずつと頭をなでなでしてくれてた。追い付いてきたレーちゃんが「は、破廉恥じやないのか？」とか言つてたけど気にしない気にしない。

さらに言つちやえば隣で見えたアフィンお兄ちゃんが顔を赤くして「だ、大丈夫なのか？」とかおろおろしてたしね。

いやあ……：：：本当にフィリアお姉ちゃんのお胸はふかふかだよ……：：：。

リユー姉ちゃんが夢中になるのもわかる気がするよ……：：：。

気がついたら既に飛び込んできるとかザラだしね。  
しかも柔らかくて心地良いもんだからつついつい寝ちやいそうになつちやう。  
また会つたらぎゅーっしてしてもらおう。

○月◇日 あめ

『クラさんとはつちりばかり受けててかわいそう』

今日は市街地では雨が降つた。

あまりにも退屈だからリユー姉ちゃんには内緒で訓練施設区画まで行ってきたよ。

そしたらそこには一心不乱に拳を仮想エネミーに叩きつけているクラさんがいたの。終わったときを見計らって、「何してるのー?」って声をかけたら、「日頃の鍛練つてやつだよ。俺に何か用事があったのか?」って。

「なんでもないよ、ただ退屈だから来たの」って答えたらクラさんはそうかつて一言言つてまた訓練を始めちゃった。

それから少しして、「私もやりたいなあ、ダメ?」って聞いたら別に良いぞって言うてくれた。

せつかくだからクラさんに相手になつてもらおうかなと思つて、クラさんに一言声をかけたよ。

そして一通りの訓練メニューを終えた頃にリユー姉ちゃんがやってきたの。

この時リーナは顔にちよつとしたかすり傷がついてたの。

訓練の一環でかすつちやつてね、でも終わった後にクラさんからすごく謝られたの。

そのかすり傷をリユー姉ちゃんが見つけちゃって……。

←これがその会話ね。

「ちよつとクラさん!?うちの妹をキズモノにしたねえ!」

「へあつ!?何て事言いやがる!あれは俺と訓練しただけの傷でな!」



「ぬあにをう！この子のほった見てごらんよ！このラブリーな顔に傷がつ！」

「り、リユー姉ちゃんクラさんがかわいそうだからもうやめなよう……」

「いや、今日という今日は思い知らせてやるんだから!!表に出るおい！」

「いいぜやってやらあ！途中でへばんじやねえぞ！」

……つてそんなことがあったからリーナはおろおろしちゃったよ。

どうしようどうしようって困ってたらちようど訓練を終えてきたエツさんとブレイドさんが通りかかってきて、困ってるリーナを見かねたブレイドさんが「どうした？」って聞いてくれたの。

「リユー姉ちゃんとクラさんがケンカしちゃったよ……」って言ったらブレイドさんはひとつ大きなため息をついて、エツさんは「またか」って感じで頭を抱えてたよ。

で、少ししてから頭の上に大きなたんこぶを作ってブレイドさんに引きずられてるリユー姉ちゃんと、長銃で撃たれたであろうペイント弾まみれになってとぼとぼと歩いてきたクラさんを見送って、リーナはマイルームに帰ったよ。

その日のリユー姉ちゃんだけ見ちやうと、なんだかおバカさんだなあ……つて思った。

クラさんはいつともとぼつちり受けてるような……？

○月▽日 くもり

『アーク叔父さんから学ぶ淑女の作法教室！』

今日はリユー姉ちゃんと一緒に市街地へお買い物しに行ったよ。

で、市街地にあるちよつと有名なレストランに行ったんだけど……。

なんだかすごい敷居の高そうな雰囲気があったんだよね……そんなときに聞きなれた声が横から聞こえてきたの。

「珍しいな、君らがここに来るとは」そう一言言ってリーナたちのそばまでやってきたのは、普段から色々とお世話になってるアーク叔父さんだったの。

とりあえず経緯を話したら、アーク叔父さんは「ふむ、わかった。ならば私が僭越ながら教えるでしょう」って私たちを連れてカフェの空いてた席に行ったよ。

あ、これ終わった後のことなんだけど、お作法のお勉強会が終わった後にアーク叔父さんがケーキを奢ってくれたよ！

美味しかった！

「——これで、よし。書けた！」

「何が書けたって？」

「にやああ?!リユ―姉ちゃん!？」

「そこまで驚かなくてもいいじゃないのよ……」

「い、いつからいたの？」

「ついさっきね。そろそろ任務だけど……行けそう？」

「うん！行けるよ！」

「りよーかい。じゃ、行くわよ」

「はーい！」

今日は、どんなことがあるかな。

楽しいこと、嬉しいことだと、嬉しいな！

E p i s o d e   L i n a . . .   t o   b e   c o n t i n u e d ?

テオドール「お願いだからあの歌でいじらないで……  
（泣）」

ある日のアークスシップ。

そのカフェエリアの一角で、数人のアークスが雑談を楽しんでいた……一人を除いては。

「へー、そんな事があつたんだ。楽しかった？」

「うん、凄く。自分の気持ちを歌にするのって悪くないかなって思ったの。ブレイドにも聞いてほしかったな……」

「悪かったな。その時はそのバカと任務だったものだな」

「こらブレさん、バカとはなんだバカとは！私はこれでもスーパーなヒーローなんだぞうー！」

「ヒーロー（笑）」

「ぬぬぬうううう!!」

そんな会話の横で、気弱な青年デューマンが口を開く。

「——あの、さ」

「ん？」

「む？」

「どうして、僕がここにいるのかな」

「え、どうしてってそりゃあれよ。マトちゃんだけじゃ面白くないし。だったら恐らく面白いであろうテオドール君も招いてキミは何を歌ったのか聞こうかなって」

「えっ」

うーん、この女守護輝士ホント畜生。

鬼畜の所業である。

例のあの歌を歌ったテオドールにとってそれはまさに傷口を抉るようなぶつ飛んだ発言と同義なのだ。

それ故にテオドールは困惑した。

「(どうしよう……あれはとてもじゃないけど恥ずかしくて自分からじゃ言えないよ

……というかりューさんもりューさんだよ……どうして平然とそんな事聞けるかなあ……まあそれとなくはぐらかしておけば多分大丈夫だよね……（？）」

そんな事を考えていた矢先、隣の席に座っていたブレイドから、テオドールにしか聞こえないような一言をぼそりと呟いた。

「——」 那落のメシア」

「ひえあつ!？」

「ん?何?どしたの?」

テオドールは咄嗟に隣のブレイドの顔を見やる。

ブレイドの顔は常にネメジストヘッドで表情はわからないが、テオドールは確信した。

……この男、全て知っている……と。

となればブレイドがその気になればテオドールの小つ恥ずかしい事……すなわち己の歌った歌を目の前の二人にバラすことができる。

それだけはさせてはならない、とテオドールは何気に深く決意した。

「何か言っていたみたいだけど……ブレイド、何か言ったの？」

「気になるのか？なら言ってみてもいいが……」

「わーわーわー!!と、とりあえずそれは置いといて、そこまで言っていたのならブレイドさんたちも来たら良かったのについて僕は思いますよ……?」

「ほう……」

テオドールの意図的な話題変換に二人は対して追及しなかったが、ブレイドは確信した。

……この男、やはり隠したいようだ……と。

ならばとブレイドはそれを挑戦状として受け、この小さな情報戦を制してやろうとクツクツと笑みを浮かべた。

「あー、確かに言われてみればねー。でもブレさんが歌うと思う？」

「うーん……どうだろうね……?」

「じゃあ逆にマトちゃん私がどんな歌を歌うと思う？」

「やつぱりリユーちゃんは明るいから、活発的な歌になるんじゃないかな？雰囲気も

合ってそうだよ?」

「なーるへそ。だったらブレさんは……そうだなあ、なんとなーくだけど闇が深そう」

「そうだね、なんとなーく、わかる」

「なんというか、一人になってもやってやんよみたいだね」

「そうかなあ?」

テオドールはこの時安堵していた。

良かった、思ったように話題がそつちにそれたみたいだ、と。

ブレイドすらもちよつとした情報戦とはいえ一枚上手と感じたのか、あつさり引き下ろうとした。

……だが。

「でもさあ……テオドール君ってあれよね」

「な、何かな?」

「“そういう”性格だから意外と自己嫌悪に陥ってそんな感じの歌ありそうだよね」

「!?!」



意外ツ……しかも真正面にずっと隠れていた伏兵ツ……！！

テオドールとブレイドはこの時察した。

……この女も、全て知っているツ……と。

ニヤリとリユールはテオドールを見やると、テオドールはブレイドに助けを求めめるが如くアイコンタクトを試みた。

「(た、助けて下さいブレイドさんッ！)」

「(仕方がない、助け船を出してやる)」

この間僅か二秒。

「そうとも限らんかもしれんぞ、リユール」

「ほほー、じゃあ聞こうじゃないのよ」

「確かにテオドールはこう、あれだ。気弱だ」

「そこまでストレートに言わなくても……」

「だが、そう見えてもこいつは優しいだろ。ならそこまで自己嫌悪には陥らんと思うのだが」

ふうん、トリューが納得するかのような息を漏らすと、テオドールは一先ず安堵した。少しして、カフェに新たな客人が現れる。

「あ、いたいた。おーいテオー！」

「あ、ウルク……どうしたんだい？」

「いやあ仕事が少し落ち着いたからカフェに寄ったらテオたちがいたからさー。何話してたの？」

「あーその、それは……」

「以前のレクリエーションの話をな」

一人増えてさらに会話がはずむが、この数秒後、他でもないウルクから爆弾が投下される。

「あ、そういえばさ」

「？」

「ついこの間ね、カスラからこんなのもらったんだよね」

「音楽データ……?」

空間にディスプレイを投影し、いくつかの表示を見せたのち、テオドールが硬直する。ブレイドも気にしたのか、画面を見るとその画面にはいくつかの楽曲名とその歌い手が表示されており、その中に”那落のメシア V o, テオドール”と表示されていた。

「これ、テオが歌ったんだよね?」

「あ……ああ……」

一番知られたくない人に知られた、そんな顔である。

それからと言うものの、テオドールはこの時だけは口を貝殻のように閉じ、多くは語らなかつた。

「……リユール」

「何かなブレさん」

「お前は、知っていたのか?」

「ん? なーんにも。なんか隠したような感じはしてたから本人から聞こうと思ってさ」

「この鬼畜めが」

「なははー、それほどもー」

「誉めてないぞ」